

出雲市埋蔵文化財調査報告書 第6集

県立看護短大教員宿舎整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

小山遺跡

1996年3月

出雲市教育委員会

小山遺跡報告書正誤表

頁	行	図	誤	正
7	-	5	図中の方位	本来の真北は図中の方位よりも 西に37.5°修正
沙録	-	-	東緯	東經

出雲市埋蔵文化財調査報告書 第6集

県立看護短大教員宿舎整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

小山遺跡

1996年3月

出雲市教育委員会

序

このたび、島根県立看護短大教員宿舎整備事業に伴う小山遺跡発掘調査を実施した結果、奈良時代を中心とする土器類などの遺物が出土したほか、多くの柱跡や土坑、溝などの遺構も検出されました。

また、県内での発見例はそう多くはない文字資料が、墨書き土師器とヘラ書き須恵器にそれぞれ確認できました。この事実は、これまで不明な点が多かった小山遺跡が、『出雲国風土記』に記載された「神門郡八野郷」の中心付近である可能性が高いことを示唆しており、貴重な成果と言えます。

今後も、地元の皆様の熱意により、後世にこの遺跡を伝え、また、この成果が広く活用されることを期待するとともに、発掘調査及び本書を発刊するにあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

平成8年(1996)3月

出雲市教育委員会

教育長 鐘 築 芳 信

例　言

1. 本書は出雲市役所総務課の依頼を受けて、出雲市教育委員会が平成6年度(1994年度)に実施した島根県立看護短大教員宿舎整備事業に伴う小山遺跡発掘調査の報告書である。

2. 発掘地は次のとおりである。

小山遺跡（出雲市遺跡地図G04）　島根県出雲市小山町648番地3、同650番地19

3. 発掘調査は、平成6年8月17日に着手し、平成6年9月13日に終了した。

4. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　出雲市教育委員会

事務局　出雲市役所総務課

調査指導　広江耕史（島根県教育委員会文化課主事）

調査担当者　川上　稔（文化・スポーツ課係長）

三原一将（同主事）

5. 本書の執筆・編集は川上の指導の下、主として三原が行った。

6. 遺構の略称記号は、次のとおりである。

S K：土坑　P：柱穴　S D：溝状遺構　S X：性格不明遺構

7. 本書で使用した方位は真北を示す。

8. 遺物実測図では、断面の表示を便宜上、弥生土器及び土師器：白抜き、須恵器：黒塗りとした。

9. 遺物の出土量を示すために用いたコンテナは、内容積 27.5 ℥ のものである。

10. 発掘調査、遺物整理、報告書作成等については、次の方々の協力を得た。

発掘調査　長谷川博（総務課長）、井上芳明（同係長）、青木　直（同係長）、岡　文造（同主事）、

新宮雅子（文化・スポーツ課長補佐）、糸賀伸文、勝部和子、嘉藤彰子、加藤憲治、

久屋洋子、古山英二、新藤忠良、角森良晴、中野治夫、長岡敬介、野村英俊、

長谷川智以子、浜村虎夫、浜村明市、藤原美夫、横原紀枝、三木　剛、矢田たづ子、

山根賢二、吉川善美、和田恒義

遺物実測　遠藤正樹、高橋智也、藤永照隆、竹田章乃

遺物整理　小村眞子、永田節子

編集補助　羽木伸幸

11. 遺物の写真撮影は三原が行った。

12. 本遺跡の出土遺物及び実測図・写真は出雲市教育委員会で保管している。

目 次

序
例 言
目 次
挿図目次
写真図版目次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査に至る経緯	3
第3章 調査の概要	3
第4章 遺構と遺物	
1. 1区の遺構と遺物	9
2. 1区遺構外の出土遺物	15
3. 2区の遺構と遺物	18
4. 2区遺構外の出土遺物	22
5. 3区の遺構	24
6. 小山跡出土の墨書き土師器及びヘラ書き須恵器	25
第5章 まとめ	27
参考文献一覧	28
土器観察表	29
石器観察表	34
写真図版	35
報告書抄録	

挿図目次

第1章 位置と環境	第29図 S D04出土須恵器実測図 (S=1/3)20
第1図 小山遺跡周辺の主要遺 (S=1/25,000)2	第30図 S D05出土弥生土器実測図 (S=1/3)21
第3章 調査の概要	第31図 S D06出土土師器実測図 (S=1/3)21
第2図 調査区配置図 (S=1/500)4	第32図 S D07出土弥生土器実測図 (S=1/3)21
第3図 小山遺跡1区遺構配置図 (S=1/60)5	第33図 S D07出土須恵器実測図 (S=1/3)21
第4図 小山遺跡2区遺構配置図 (S=1/60)6	4. 2区遺構外の出土遺物
第5図 小山遺跡3区遺構配置図 (S=1/60)7	第34図 遺構外出出土土師器実測図 (S=1/3)22
第4章 遺構と遺物	第35図 遺構外出出土須恵器実測図 (S=1/3)23
1. 1区の遺構と遺物	第36図 遺構外出出土石器実測図 (S=1/2)24
第6図 S K01実測図 (S=1/30)9	6. 小山遺跡出土上の墨書き土師器及び ヘラ書き須恵器
第7図 S K01出土土器実測図 (S=1/3)9	第37図 墨書き土師器実測図 (S=1/3)25
第8図 S K02実測図 (S=1/30)10	第38図 ヘラ書き須恵器実測図 (S=1/3)25
第9図 S K02出土須恵器実測図 (S=1/3)10	第39図 墨書き土師器出土状況 (S=1/40)26
第10図 S K03実測図 (S=1/30)10	第40図 ヘラ書き須恵器出土状況 (S=1/40)26
第11図 S K03出土土器実測図 (S=1/3)10	
第12図 S K06出土須恵器実測図 (S=1/3)11	
第13図 S K07実測図 (S=1/30)11	
第14図 S K07出土土師器実測図 (S=1/3)11	
第15図 S K07出土須恵器実測図 (S=1/3)12	
第16図 S K08実測図 (S=1/30)12	
第17図 S K08出土土器実測図1 (S=1/3)12	
第18図 S K08出土土器実測図2 (S=1/3)13	
第19図 P116出土須恵器実測図 (S=1/3)13	
第20図 P119出土須恵器実測図 (S=1/3)13	
2. 1区遺構外の出土遺物	
第21図 遺構外出出土弥生土器実測図 (S=1/3)15	
第22図 遺構外出出土土師器実測図 (S=1/3)15	
第23図 遺構外出出土須恵器実測図 (S=1/3)16	
第24図 遺構外出出土土製品実測図 (S=1/3)17	
3. 2区の遺構と遺物	
第25図 S K02出土須恵器実測図 (S=1/3)18	
第26図 P028出土須恵器実測図 (S=1/3)19	
第27図 S D01出土土製品実測図 (S=1/3)19	
第28図 S D01出土石器実測図 (S=1/2)20	

写真図版目次

- 図版 1-1 調査前全景（南から）
2 表土掘削状況（北から）
3 調査区配置状況（南から）
4 調査風景（南西から）
5 調査風景（南西から）
6 埋め戻し状況（南西から）
- 図版 2-1 1区遺構検出状況（南東から）
2 1区 S K01遺物出土状況（東から）
3 1区 S K02遺物出土状況（北東から）
4 1区 S K03遺物出土状況（南東から）
5 1区 S K06遺物出土状況（北西から）
6 1区 S K07遺物出土状況（南西から）
- 図版 3-1 1区 S K08遺物出土状況（北西から）
2 1区遺構外遺物（23-9）出土状況
(北から)
3 1区遺構外遺物（24-1）出土状況
(北東から)
4 1区完掘状況（北東から）
5 1区完掘状況（南東から）
6 1区完掘状況（南東から）
- 図版 4-1 2区 S K02遺物出土状況（北東から）
2 2区 P016完掘状況（南東から）
3 2区 S D01遺物出土状況（北東から）
4 2区 S D04遺物出土状況（南東から）
5 2区 S D05完掘状況（南東から）
- 図版 5-1 2区 S D06完掘状況（南東から）
2 2区 S D07遺物出土状況（南西から）
3 2区遺構外遺物（34-1）出土状況
(北から)
4 2区遺構外遺物（35-8）出土状況
(南西から)
5 2区遺構外遺物（38-1）出土状況
(北西から)
- 図版 6-1 2区完掘状況（北東から）
2 2区完掘状況（南東から）
3 2区完掘状況（南東から）
4 3区遺構検出状況（南東から）
5 3区遺構検出状況（南西から）
6 3区遺構検出状況（南西から）
- 図版 7-1 3区完掘状況（北西から）
2 3区完掘状況（南東から）
- 図版 7 1区～3区出土遺物
図版 9 小山遺跡出土墨書き須恵器
- 図版10-1 小山遺跡出土墨書き須恵器
2 小山遺跡出土ヘラ書き須恵器

第1章 位置と環境

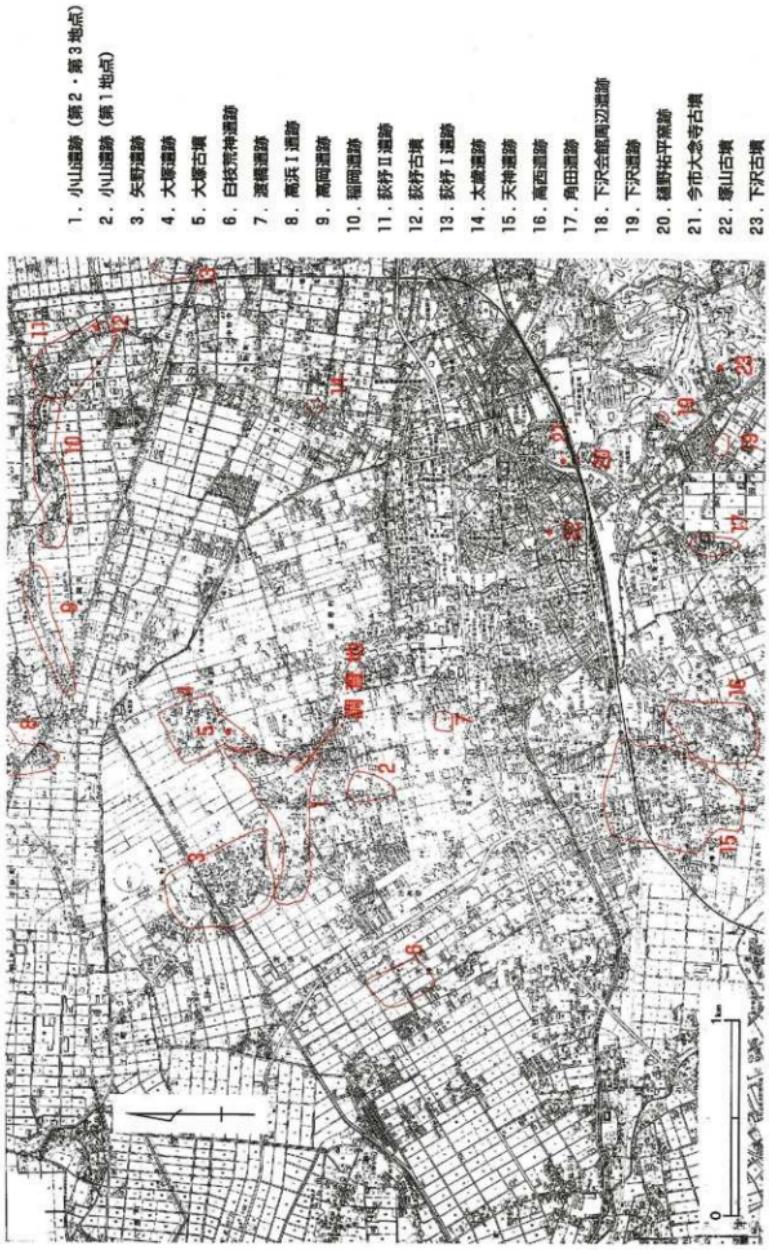
小山遺跡は、出雲市街地の北に隣接し近年ますます宅地化が進む四絡地区に占地している。また、付近の弥生時代の拠点集落と考えられる矢野遺跡や、大塚古墳を有し土師器の散布地である大塚遺跡などとともに四絡遺跡群を形成する遺跡の一つである。当地は奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によると、当時西流する斐伊川や神戸川が流入する「神門入海」と記載された潟湖に臨んでいたことがうかがえる。その後、両河川の沖積作用により潟湖が縮小し、沖積低地である出雲平野が拡大したので、現在では出雲平野中央部やや北寄りの微高地上に位置している。出雲平野は斐伊川と神戸川の沖積作用により形成された沖積低地であり、氾濫原や三角州の河道に沿って発達した自然堤防が微高地となってその地形を現在に残しているが、小山遺跡が存在する微高地は、神戸川の河口付近に形成されたものであると考えられる。また、同書によると付近は「神門郡八野郷」に比定されている。

小山遺跡は山本清氏による出雲市大津町出土土師器の報告に端を発し、隣接する小山町の旧四絡小学校付近やNHKラジオ放送所の敷地から土器が発見されたという池田満雄氏の報告により、その存在が明らかになった。その後の調査を振り返る。1967年に島根県立出雲高等学校社会部考古班が、今回の調査地のやや北側で、 $1.5m \times 15m$ 程度の簡単なトレンチ調査を行った。この調査では、弥生土器片が出土したようである。^{註1)} この直後と思われるが、旧四絡小学校の講堂予定地を重機で造成中に、備前壺と同時期の皿4点が出土している。^{註2)} 次に、出雲考古学研究会が遺物の表面採取を実施し、散布密度の高い地点を小山第1～3地点とした。また、1989年には島根大学法文学部教授田中義昭氏が、小山遺跡第1地点で古代金属生産に係る発掘調査を行い、弥生時代後期の溝状遺構や鉄滓を出土する柱穴様ピットなどを確認している。^{註3)}

今回の調査地付近は、先に述べた出雲考古学研究会によって地点分けされた小山第3地点にあたる箇所であり、神戸川旧河道の右岸の微高地上である。先に述べた諸報告によると、調査地付近は弥生時代後期ごろから人々の生活の場となり、奈良・平安時代を中心とする遺跡であることがうかがえる。つまり、弥生時代後期ごろには拠点集落である矢野遺跡に付随して造営され、古墳時代の動向は資料が少なく不明であるが、奈良・平安時代以降は再び人々の生活の場となつたようである。

註

- 1) 山本 清 「出雲市大塚町上ノ岡散布地」『島根考古学』第2号 1948
- 2) 池田満雄 「四絡小学校付近出土土器」『出雲市の文化財』第1集 1956
- 3) 出雲高校社会部 「発掘レポ」『紫苑』7号 1968
- 4) 岡崎雄二郎 「出雲市・小山遺跡出土の備前壺」『松江考古』第8号 1992
- 5) 出雲考古学研究会 「古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡II」 1986
- 6) 田中義昭 「出雲市小山遺跡第1地点の調査」『古代金属生産の地域的特性に関する研究』 1992



第1図 小山遺跡周辺の主要遺跡 ($S = 1/25,000$)

第2章 調査に至る経緯

平成6年(1994)7月25日付けで、出雲市長(総務課)より、島根県立看護短期大学教員宿舎整備事業予定地における、埋蔵文化財の有無の確認調査依頼が、出雲市教育委員会教育長宛てになされた。事業予定地は周知の遺跡である小山遺跡の範囲内であったため、調査箇所を限定することを目的に、平成6年8月4日に試掘調査を実施した。その結果、4カ所に設置したすべての試掘トレンチから溝、柱穴などの遺構や、須恵器片などの遺物が確認されたため、その旨を出雲市長に回答した。その後の協議で、事業着手前に宿舎2棟及び合併浄化槽建設予定部分を調査の対象とすることとなつたが、すでに本調査を実施する必要があることが明白であったため、平成6年8月2日付けで、出雲市長より文化庁長官宛てに、文化財保護法第57条の3第1項の規定による埋蔵文化財発掘の通知がなされていた。島根県教育委員会はこの通知に対し、工事着手前に発掘調査を実施するよう平成6年8月5日付けで出雲市長に通知していたため、発掘調査の依頼を出雲市教育委員会が受けたのは平成6年8月15日付けである。出雲市教育委員会も本調査を見越して、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知を平成6年8月8日付けで文化庁長官宛てにすでに行っていたため、平成6年8月17日から発掘調査に着手した。便宜上、宿舎2棟建設予定部分を1区・2区、浄化槽建設予定部分を3区と設定し、9月13日までの約1カ月間にわたり発掘調査を実施した。

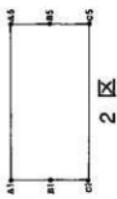
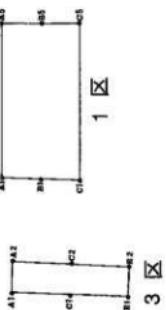
第3章 調査の概要

県立看護短大教員宿舎整備事業では、宿舎2棟(計405m²)、合併浄化槽(48m²)の建設が予定されていたため、宿舎部分をそれぞれ1区と2区、合併浄化槽部分を3区として調査を実施することとした。地表より約50cm下までは造成土であることが試掘調査により確認されていたため、その部分は重機により掘削した。その後は手掘りにより掘削し、堆積土層ごとに精査を行い遺構の検出に努めた。1区と2区をそれぞれ東西16m×南北8mの調査区とし、双方に4m×4mのグリッドを8区画設定した。また、3区は東西3m×南北12mの調査区とし、3m×3mのグリッドを4区画設定した。いづれも東西方向にA～Eライン、南北方向に1～5ラインを設定し、交点をA1、B2などと呼称しその南東のグリッド名とした。

1区と2区の層序は、上層から、造成土、1灰褐色土層(遺物包含層)、2暗褐色土層(遺物包含層)、3黄褐色シルト層(地山)となっており、主に3黄褐色シルト層上面で遺構を検出した。また、3区の層序は、上層から、造成土、1灰褐色土層、2灰褐色砂層(地山)であり、2灰褐色砂層上面のみで遺構を検出した。出土遺物の多くは須恵器、土師器の破片であり、弥生土器片も若干出土している。1区と2区からの出土がほとんどで、合わせてコンテナ6箱分にのぼるが、3区からは、1灰褐色土層より土師器片1点を出土するにとどまっている。

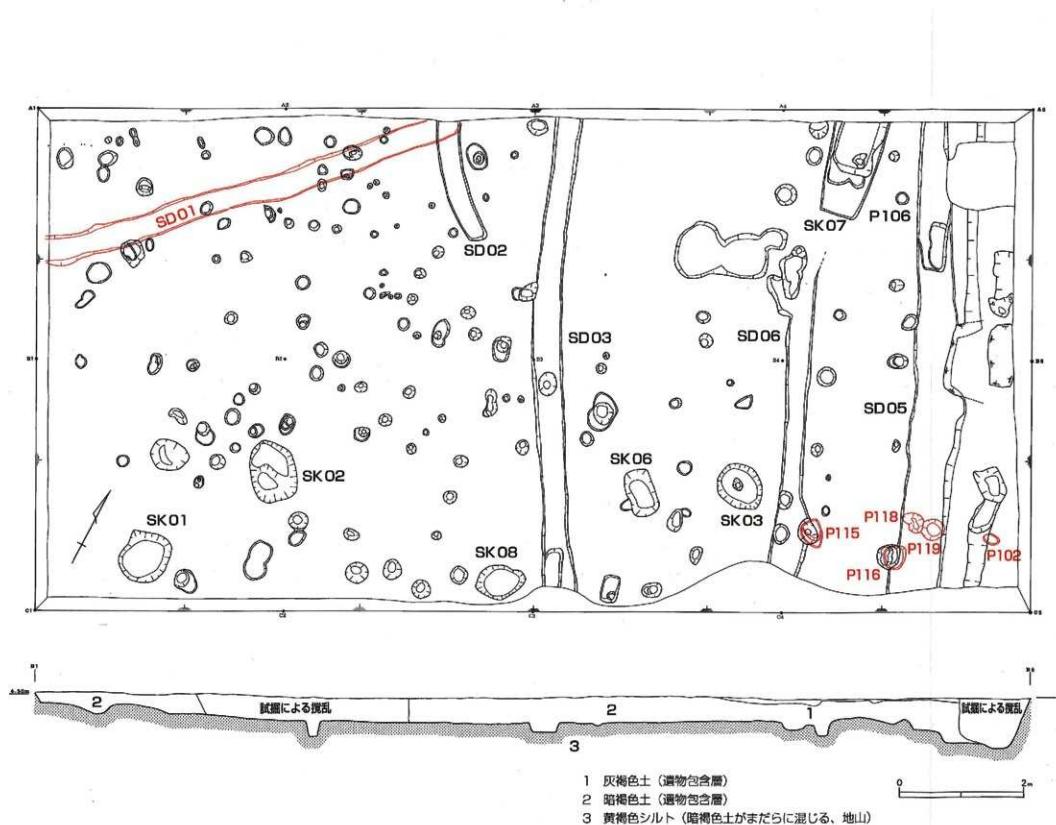
四 絡 幼稚園
道

→ A 四 絡 支 所 廉 蓄

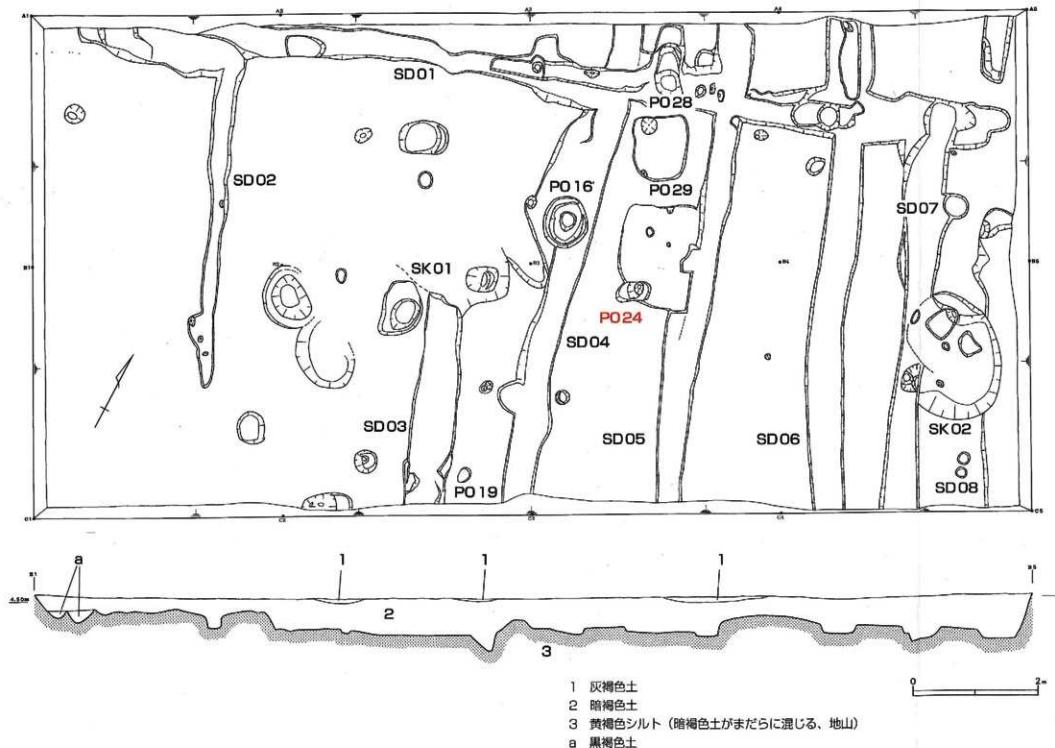


0 10m

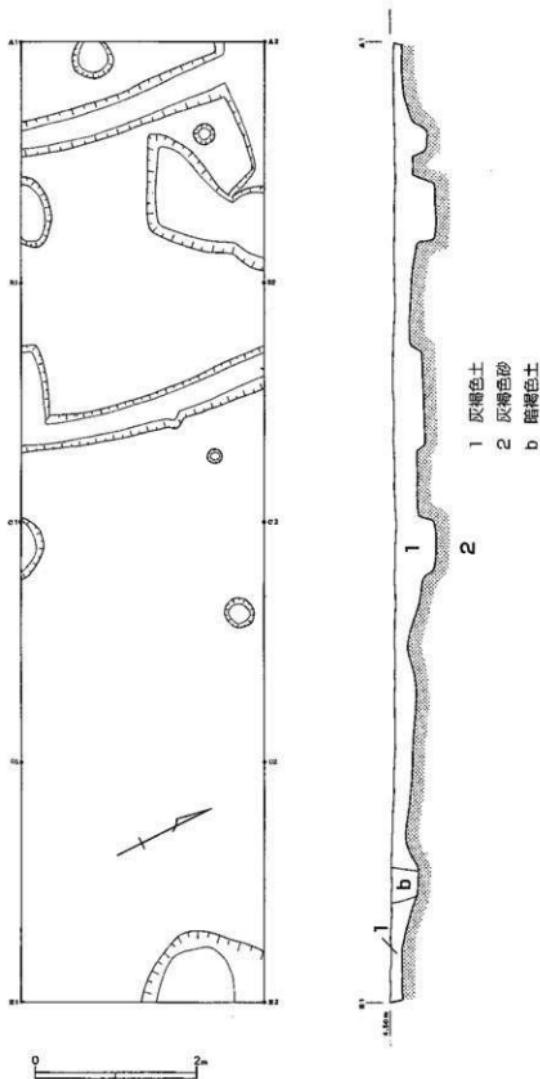
第2圖 調査区域図 (S = 1/500)



第3図 小山道路1区遺構配置図 (S=1/60)



第4図 小山遺跡2区遺構配置図 (S = 1 / 6 0)



第5図 小山遺跡3区遺構配置図 (S = 1/60)

第4章 遺構と遺物

1. 1区の遺構と遺物

1区においては、2暗褐色土層及び3黄褐色シルト層(地山)で遺構を検出した。2暗褐色土層上面で検出した遺構は南西方向に延びるS D01のみであり、他のすべての遺構は3黄褐色シルト層上面で検出した。この面では、土坑、ピット多数、溝状遺構などを検出している。B 4グリッドでは、ピットと溝状遺構の切り合いも観察できた。

土坑

土坑は、3黄褐色シルト層上面で長径80cm程度のものを8基検出している。

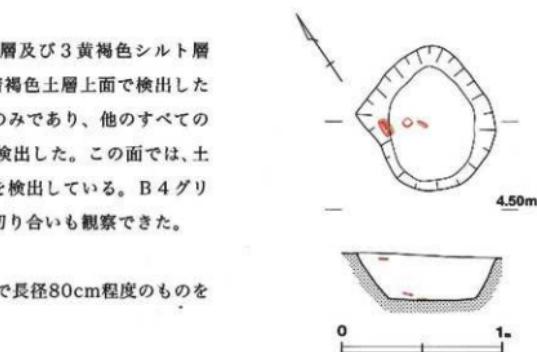
S K01 (第6・7図)

B 1グリッドで検出したSK01は検出規模が長径90cm、短径75cm、深さ28cmを測る楕円形の平面プランの遺構である。坑底は平坦であり、側壁はやや急な傾斜である。出土遺物は少なく、実測図を掲載し

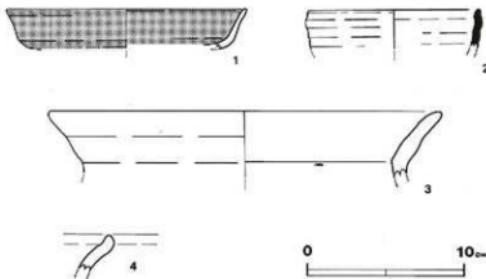
たもの以外に、須恵器、土師器の小片がそれぞれ数点出土しているに過ぎない。**7-2**の須恵器の环は、高広遺跡出土須恵器編年⁽²⁷⁾のⅢA期に相当するものと考えられるが、小片であるためこの遺構の時期を特定する遺物とはなり得ない。

S K02 (第8・9図)

B 1グリッドとB 2グリッドにまたがってSK02を検出しした。検出規模は長さ100cm、

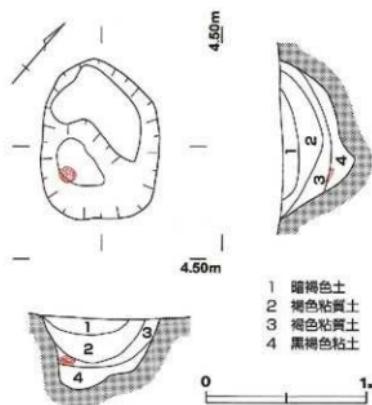


第6図 SK01実測図(S=1/30)

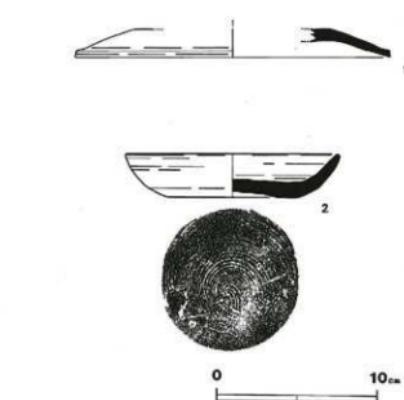


第7図 SK01出土土器実測図 (S=1/3)

幅73cmを測り、長軸を北西方向にとる。遺構の南隅が最も深く、検出面からの深さは45cmを測る。また、この最下底から側壁は変則的に立ち上がっている。覆土は4層確認でき、上位から1暗褐色土(下部に炭化物が1cm程はある)、2褐色粘質土(黄褐色シルトブロック含む)、3褐色粘質土(粘性大)、4黒褐色粘土の順である。いずれの層からも須恵器あるいは土師器の小片が数点出土している。特に、4黒褐色粘土からは**9-1**、**9-2**に示した比較的大きな須恵器片も出土しており、いずれも高広Ⅳ期に相当すると考えられることから、この遺構はこれに近い時期に築かれたことが推定できる。



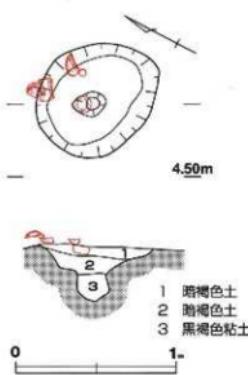
第8図 SK 02実測図 (S=1/30)



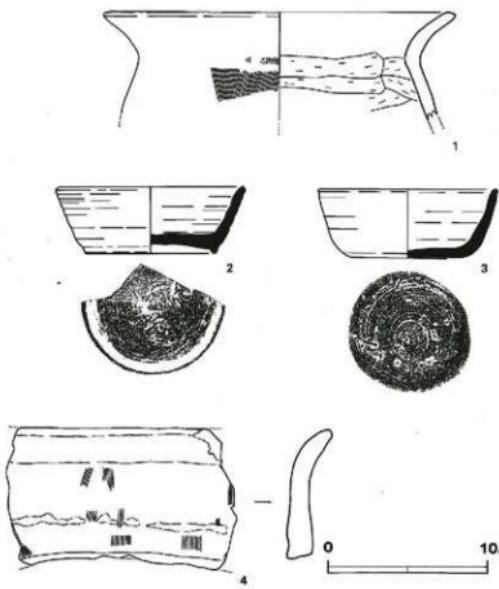
第9図 SK 02出土須恵器実測図 (S=1/3)

SK 03 (第10・11図)

B 3グリッドでSK 03を検出し
た。平面プランは不整な楕円形を
呈しており、検出規模は長径81cm、
短径66cmを測る。遺構の中央部は
ほぼ垂直に落ち込み、漏斗状の断
面を呈している。検出面から最下



第10図 SK 03実測図 (S=1/30)



第11図 SK 03出土土器実測図 (S=1/3)

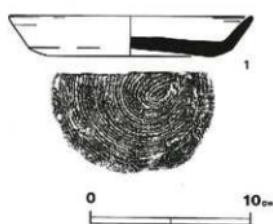
底までの深さは34cmを測る。1暗褐色土、2暗褐色土（黄褐色シルト・砂混じり）、3黒褐色粘土（砂混じり）の覆土が確認でき、1・2層を中心に須恵器、土師器の小片が出土する。11-2、11-3は高広IVB期に相当すると考えられ、11-4は竈の焚口上部の破片であり、底部が剥離している。

SK06（第3・12図）

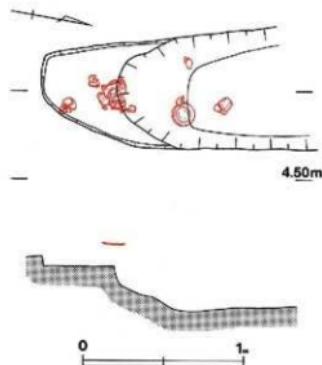
B3グリッドでSK06を検出した。検出規模は長さ77cm、幅46cm、深さ34cmを測り、坑底は平坦である。出土遺物は少なく、図化したもの以外には須恵器の小片3点を数えるに過ぎないが、この中には蓋壺の蓋の口縁部片も含まれている。12-1は須恵器の皿で、比較的大きな破片である。高広IVA期に相当するものであろう。

SK07（第13・14図）

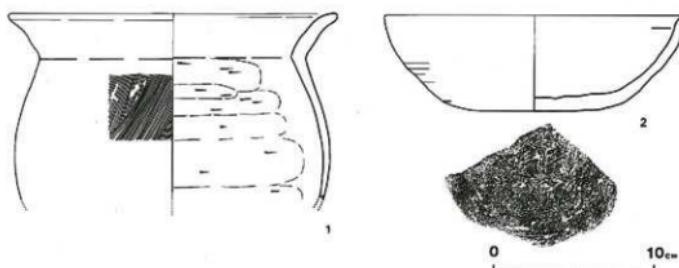
A4グリッドでSK07を検出した。調査区北壁際で検出したため、調査区外にも遺構が続いており、溝状を呈する遺構である可能性も秘めている。よって、正確な規模は不明であるが、検出規模は長さ172cm以上、幅76cmを測る。深さについては最も深い箇所で34cmであるが、北北西に軸をとり、遺構の南端から中心に向かい45cm間の坑底の深さは6cmと浅い。覆土の上・中層を中心に、比較的大きな須恵器、土師器の破片が出土する。土師器の破片のほとんどは14-1に示す如く復元できた。器表には煤の付着が観察でき、実際に煮炊きに使用されたものであろう。この遺構が築かれた時期を推定する遺物として、完形で出土した15-2に示す須恵器の壺があげられ、高広IVA期に相当すると考えられる。



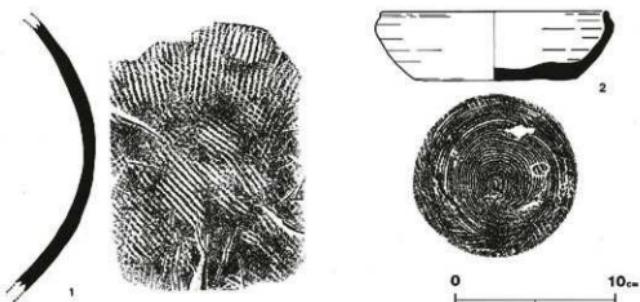
第12図 SK06出土須恵器実測図 (S=1/3)



第13図 SK07実測図 (S=1/3)



第14図 SK07出土土師器実測図 (S=1/3)



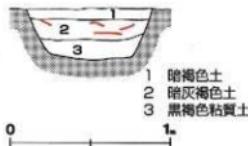
第15図 SK07出土須恵器実測図 (S=1/3)

SK08 (第16~18図)

B2グリッドの調査
区南壁間近でSK08を
検出した。検出規模は
長径83cm、短径57cm、
深さ32cmを測る。検出
面での平面プランは不
整な橢円形を呈するが、
坑底は径48cmの円形に
近い平面プランである。
覆土は上位から1暗褐色



第17図 SK08出土土器実測図1 (S=1/3)



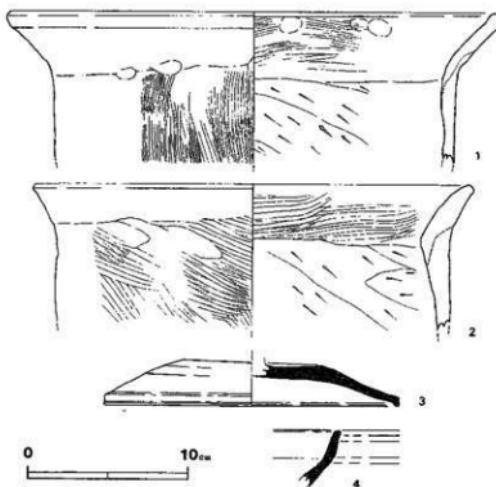
第16図 SK08実測図 (S=1/3 0)

色土、2暗灰褐色土、3黑褐色粘質土の順であり、2・3層を中心に
多数の土師器片が出土する。これらの破片の多くは17-1に示す甕の
破片である。底部が欠けるが口縁部から胴部にかけては大部分復元で
きた。その他の破片の接合を試みた結果、いずれも完形にはならない
が、土師器の甕3個体、須恵器の壺1個体、赤色塗彩を施した土師器

の壺1個体が少なくとも包含されていたことが分かった。しかし、これらは17-1と比較しその残存状態が悪いため、この遺構に何らかの理由で入り込んだ時には、すでに破片の状態であつただろうと考えられる。

この遺構の築かれた時期をうかがい知る遺物として、18-3に示す須恵器の壺があげられる。高広IV A期の所産であろうが、小片のため推測の域を出ない。

第18図 SK08出土土器
実測図2 (S=1/3)



ピット

ピットについては3黄褐色シルト層(地山)上面で120基程度を検出しているが、規則的に並ぶものではなく、建物に伴うものか不明である。直径は10cm~30cm程度であるが、20cm前後のものが多い。P115~P120の6基は、同一面で検出した溝状遺構を切った状態で観察できた。出土遺物を伴うピットはP106、P116、P119の3基のみであり、図化に耐えるものは下に示した2点を数えるに過ぎない。

P106 (第3図)

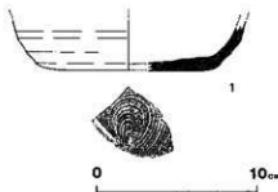
A 4グリッドで検出したP106の検出規模は径21cm、深さ13cmを測る。この遺構から須恵器の壺底部から体部にかけての小片が1点出土した。底面には回転糸切りの痕跡が観察できる。

P116 (第3・19図)

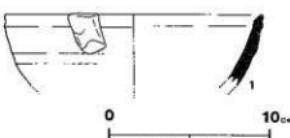
B 4グリッドからSD05を切った状態で、P116を検出した。検出規模は径36cm、深さ24cmを測る。出土遺物は19-1に示す須恵器の壺の小片1点のみである。底面に回転糸切りが観察でき、器壁は内湾気味に立ち上がる。高広IV A期に相当するものであろう。

P119 (第3・20図)

B 4グリッドからSD05を切った状態で、P119を検出した。検出規模は径36cm、深さ10cmを測り、20-1に示す須恵器の壺の口縁部が1点出土している。



第19図 P116出土須恵器実測図 (S=1/3)



第20図 P119出土須恵器実測図 (S=1/3)

溝状遺構

2暗褐色土層上面で検出したSD01以外の溝状遺構であるSD02～SD06は、いずれも3黄褐色シルト層上面で検出している。SD03～SD06は遺構が伸びる方向が北北西と共通しており、規則性がうかがえる。これらからは出土遺物がないため、遺構の時期及び性格など不明な点が多いが、中には約13m離れた2区の溝状遺構につながると考えられるものもあるため、後ほど合わせて記述したい。

SD01 (第3図)

A1グリッドからA2グリッドにかけてSD01を検出した。2暗褐色土層上面で検出した唯一の遺構である。他の溝状遺構と異なり北東方向に軸を持つ。検出規模は上幅約42cm、深さ約13cmを測る。標高4.15m付近の坑底は平坦で、検出した範囲の両端で高低差はない。遺構のほぼ中央で甕の胸部片と思われる9cm大の須恵器片が出土したが、それ以外の出土遺物は須恵器や土師器の破片である。これらは合計30点弱出土しているが、磨滅したものや小片がほとんどで、遺構が築かれた時期を推定する資料とはなり得ない。

SD02 (第3図)

A2グリッドでSD02を検出した。溝状遺構と捉えて調査を行ったが、遺構が途中でとぎれているため性格不明遺構として取り扱った方が適当であったと思われる。検出規模は上幅約36cm、深さ約7cmを測り、平坦な坑底を標高4.00m付近で有し、底の傾斜は認められない。

SD03 (第3図)

A3グリッドからB3グリッドにかけて検出したSD03は、北北西に軸を持ちSD04～SD06と共に通性がうかがえる。検出規模は上幅40cm～50cm程度、深さ約11cmを測り、標高3.90m付近で平坦な底を有しているが、調査範囲での勾配は認められない。

SD04 (第3図)

A4グリッドからB4グリッドにかけてSD04を検出した。SD03などと同様に北北西に軸を持つが、A4グリッドの中ほどで遺構は途切れている。検出規模は上幅32cm～40cm程度、深さ約8cmを測る。標高3.91m～3.96mに底を有しており、検出した範囲では北北西の底が南南東の底に比べ5cm未満ではあるが標高が高く、若干の勾配が認められる。

SD05 (第3図)

A4グリッドからB4グリッドにかけてSD05を検出した。SD03などと同様に北北西に軸を持つ。検出規模は上幅44cm～64cm程度を測る。深さについてはA4グリッドの中ほどで段を有しているため、北北西端で15cm、南南東端で10cmを測るが、坑底はおおむね平坦である。検出した範囲での底の勾配は認められない。なお、南南東端及び北北西端の底の標高はそれぞれ3.95m付近と3.90m付近である。

SD06 (第3図)

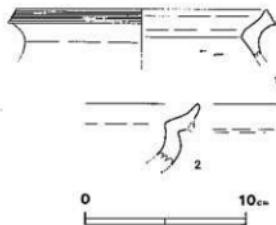
SD05に隣接してSD06を検出した。切り合い関係があると思われるが、平面のみならず断面の観察でも新旧の区別はつかなかった。しかし、便宜上別々の遺構とみなしている。検出規模は上幅120cm以上、深さ約17cmを測り、底の標高は3.75m付近である。坑底に緩やかな凹凸は有するものの、検出範囲での勾配は認められない。

2. 1区遺構外の出土遺物

1区は1灰褐色土層及び2暗褐色土層に遺物が包含されていたが、層によって時期差は認められず、複数期にわたる時期の遺物が出土する。遺構外出土遺物の量はコンテナ2箱分で、その中心は須恵器、土師器片であるが、弥生土器片も若干含まれている。

弥生土器（第21図）

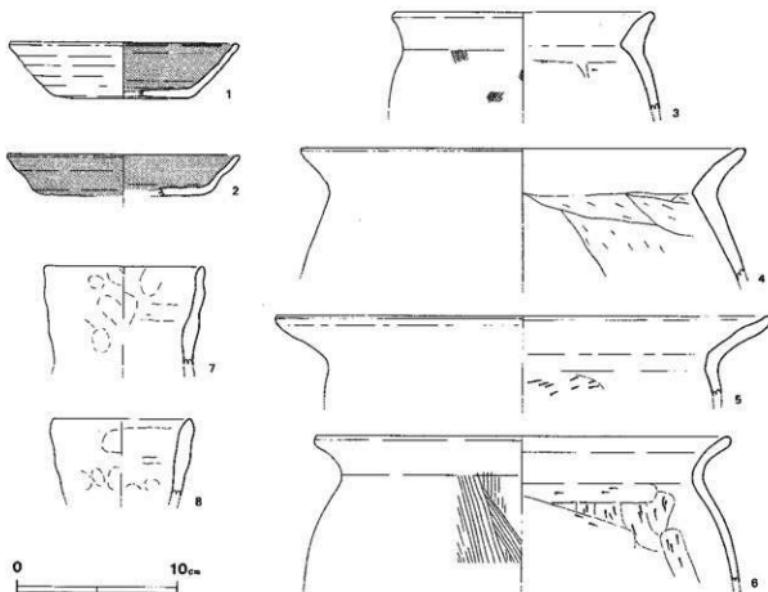
遺構から弥生土器が出土することはなかったが、遺構外から数点確認されている。21-1の壺は南講武草田遺跡出土土器編^{昭28}年の1期に相当するものであり、胴部の内面は頸部までケズリ調整が施されている。弥生時代後期前葉の所産で、今回の発掘調査において、上限の時期を示す遺物である。21-2は高壺の口縁部片と思われる。器表が風化しており明言できないが、プロボーションから推定し草田1期に相当するものであろう。これらは、付近に弥生遺跡の存在を示唆する遺物である。



第21図 遺構外出土弥生土器実測図 (S=1/3)

土師器（第22図）

土師器片は遺構外から比較的多く出土している。小片でかつ器表が風化しているものが大半を占め、実測に耐えうるものはない。22-1は壺で平安時代の所産と考えられ、内面に赤色塗彩が施されて

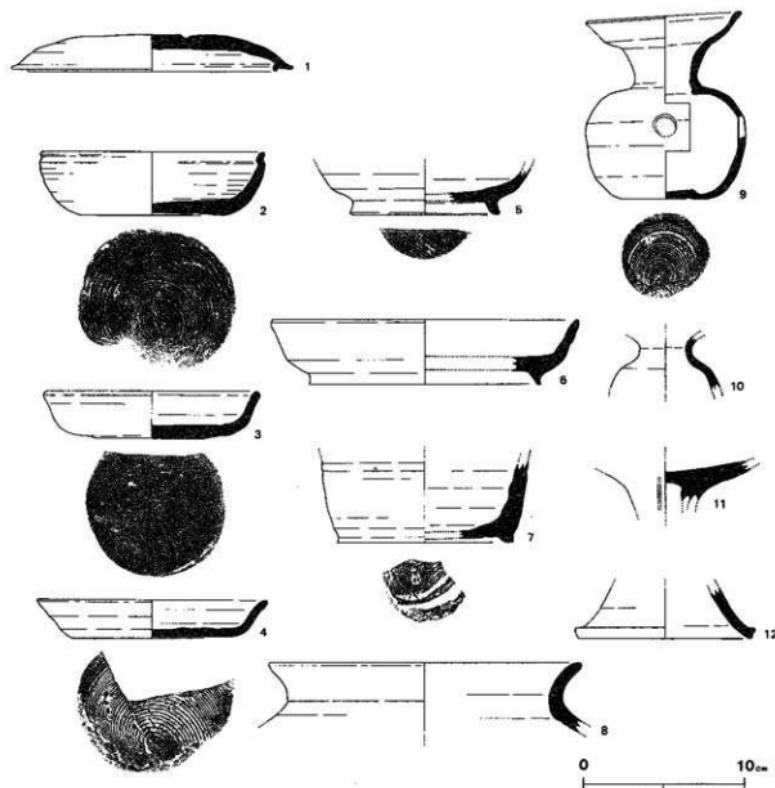


第22図 遺構外出土土師実測図 (S=1/3)

いる。22-2は皿であり、内外面に赤色塗彩が施されており、やはり平安時代のものと考えられる。22-3～22-6は甕である。22-3・22-4は頸部が肥厚し内面に稜を持つに対し、22-5・22-6は器壁が曲線を帯びて屈曲する。22-7・22-8は製塩土器と思われ、これら以外に6点の小片が出土している。製塩土器は出雲市内の遺跡では、上長浜貝塚で50個体以上出土している。¹¹⁹⁾

須恵器 (第23図)

須恵器片は土師器片に比べ出土量はやや少ないが、比較的大きな破片が出土している。23-1は蓋であり、振部は欠損しているもののその痕跡から輪状振が取り付けられたことが観察でき、口縁部にはかえりを有している。時期については奈良時代と推定できる。23-2は壺であり、やはり奈良時代のものであろう。23-3・23-4は奈良・平安時代の皿と考えられる。また、高台を有するものとして23-5～23-7があげられる。23-5の高台付壺は底部切り放し痕が不明瞭ではあるが、奈良時代

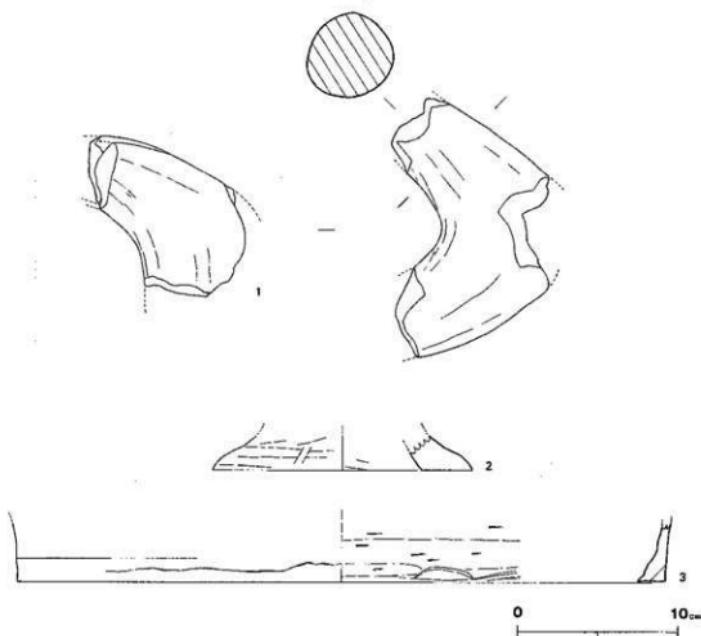


第23図 遺構外出土須恵器実測図 (S = 1/3)

のものと考えられる。23-6は焼きが甘いためにぶい橙色を呈する皿である。23-7は長頸壺の底部付近の破片と思われる。底面に回転糸切りの痕跡が残り、外縁に低い高台が付く。23-9はほぼ完形で出土した甕である。底面には回転糸切りの痕跡が残る。23-10は小型の壺の頸部から肩部にかけての破片と考えられる。23-11の高环は环部の内面に中心を示したかのような直径5mmの円形痕が残っており、また、环部から脚部にかけて貫通しない切り込み状の透かしを2方向有する。23-12は高环の裾部片と思われる。脚端部に平坦面を有している。

土製品（第24図）

土製品の出土は少なく、図示したもの以外の個体の破片は見あたらない。24-1は土製支脚である。背面が欠損しているため、據の有無は不明である。24-2は土製支脚の脚端部付近の破片と思われる。24-3は移動式甕の耐端部付近の破片と思われる。残存片の弧から推定すると、40cm程度の径を有するものであると考えられる。



第24図 遷構外出土土製品実測図 (S=1/3)

3. 2区の遺構と遺物

2区においては、3黄褐色シルト層（地山）上面のみで遺構を検出し、1区で遺構が確認できた2暗褐色土層上面では遺構を検出することができなかった。

土坑

調査時に土坑として捉えた遺構はSK01、SK02の2基だけである。1区の土坑に比べ、出土遺物が少なく、また、切り合いなどによって検出も困難であったため、規模や性格について不明な点が多く残った。

SK01（第4図）

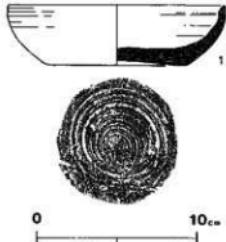
B2グリッドで検出したSK01は、遺構検出時に2m規模の土坑に見えたが、B2-B3セクションベルト以北ではそのプランを観察できなかったため、詳細は分からぬが地山上面から10cm程度下がった標高3.90m付近に底を有する何らかの落ち込みである。SD03を切っており、P010及びP012によって切られている。出土遺物は少なく、弥生土器、土師器、須恵器の小片計5点を数えるに過ぎない。

SK02（第4・25図）

B4グリッドでSK02を検出した。検出時の平面プランは梢円形を呈しており、SD07とSD08を切っている。検出規模は長径208cm、短径140cm（推定）、深さ20cm程度を測る。

坑底は標高3.75m付近で、ピット状の落ち込みや小さな凹凸を有している。出土遺物については、25-1に示す須恵器の壊が坑底から若干浮いた状態で出土している。底部の切り放しは回転糸切りであり、器壁は内湾し口縁端部付近で若干屈曲し開口していることから、高広IVA期に相当し奈良時代の所産と考えられる。この他に覆土から弥生土器あるいは土師器と考えられる土器の小片が4点出土している。

第25図 SK02出土須恵器実測図(S=1/3)



ピット

ピットについては直径10cm～100cm程度のものを30基程度確認している。1区と比べると1/4の検出数であることから、遺跡の中心から離れていることがうかがえる。規則的に並ぶものではなく性格については不明である。このうち遺物を出土したものについて以下に報告する。

P008（第4図）

P008はA2グリッドの標高3.95mの地山面で検出した直径25cm、深さ5cmを測る円形のピットである。覆土から土師器の小片1点、同一個体の須恵器の小片2点が出土した。

P012（第4図）

P012はB2グリッドでSK01を切った状態で確認した。標高4.20mでの検出時には、長径66cmの梢円形の平面プランを呈していた。完掘すると、中央部がさらに掘りくぼめられており、遺構の最下底までの深さは45cmを測る。この覆土から土師器の小片1点と別個体の須恵器の小片2点が出土した。いずれも時期や器種については不明である。

P 016 (第4図)

P 016はA 3グリッドで、標高3.90m付近のS D04の底で確認した。長径82cm、短径70cmの楕円形の平面プランを呈しており、深さは検出面から20cmである。段を有し中央部が最も深く掘り窪められている。覆土から、弥生土器の小片が1点出土している。

P 019 (第4図)

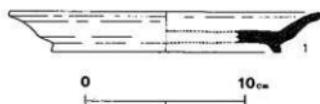
B 2グリッドの標高4.20mの地山面でP 019を検出した。直径20cmを測り、深さは7cmと浅い。土製支脚の脚部と思われる比較的大きな破片が出土している。

P 024 (第4図)

B 3グリッドの標高4.05mの地山面で、長径38cmの不整な楕円形の平面プランを呈するP 024を検出した。深さは最も深い箇所で30cmを測る。覆土からは須恵器片2点、土師器片3点が出土している。

P 028 (第4・26図)

A 3グリッドのS D01の底でP 028を検出した。検出時の標高は3.80mであり、径40cm、深さ40cmを測る。覆土から**26-1**に示す須恵器の皿が出土した。高台を有し体部は外反し開口する。高広IV期に相当するものと考えられる。この他に須恵器片3点、土師器片2点が出土している。



第26図 P 028出土須恵器実測図 (S = 1/3)

P 029 (第4図)

A 3グリッドの標高4.00mの地山面でP 029を検出した。平面プランは100cm×90cmの不整な方形状で、深さは10cmを測る。ピットとして捉えたが、性格不明遺構とした方が適当である。覆土から土師器片1点が出土している。

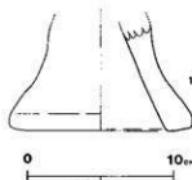
溝状遺構

3黄褐色シルト層(地山)上面でS D01～S D08の8条の溝状遺構を検出した。S D01を除く他の7条の溝状遺構は概ね北北西に軸を持ち、規則性がみられる。特に、S D04、S D05、S D06はその延長付近に1区のS D03、S D04、S D05があるため、それぞれつながる可能性が高い。

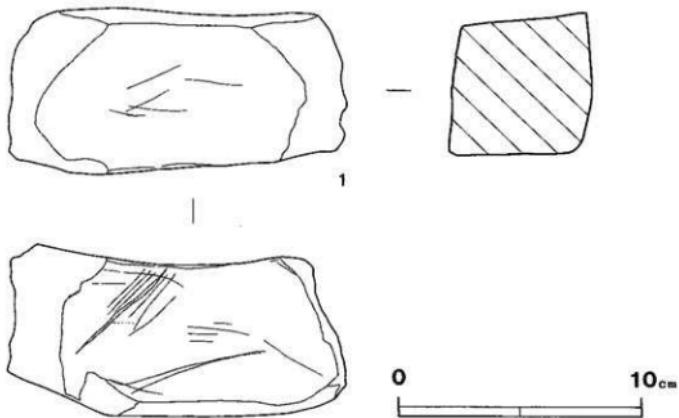
2区の溝状遺構のうち、遺物を出土するものは、S D01、S D04、S D06、S D07だけであるため、これらについて以下報告する。

S D01 (第4・27・28図)

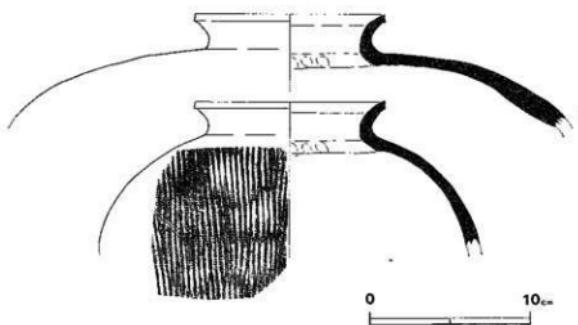
A 1グリッドからA 4グリッドにかけてS D01を検出した。東北東に軸を持ち、検出規模は上幅34cm～76cm程度、深さ15cm～25cm程度である。底の標高は3.80m～3.90m付近で変化するものの、勾配は認められない。覆土から土師器片十数点、須恵器片2点、石器1点が出土している。**27-1**は土製支脚の脚部片と思われる。器壁が厚く、脚端部に平坦面を持つ。**28-1**は砥石である。2面に研磨面を有し、切り込み状の筋を有する面が2面ある。



第27図 S D01出土土製品実測図 (S = 1/3)



第28図 SD01出土石器実測図 (S=1/2)



第29図 SD04出土須恵器実測図 (S=1/3)

SD04 (第4・29図)

A3、B2、B3グリッドにかけてSD04を検出した。北北西に軸を持ち、検出規模は上幅48cm程度、深さ4cm~13cm程度である。底の標高は3.90m~4.00mで変化し、北の方が南に比べて若干低い。

I区のSD03に類似しており、つながる可能

性がある。出土遺物は29-1に示す須恵器の横瓶のみである。20cm大の比較的大きな破片で磨滅していないことから、付近で使用されていた可能性が高い。

SD05 (第4・30図)

A3グリッドからB3グリッドにかけてSD05を検出した。北北西に軸を持ち、検出規模は上幅44cm~66cm程度、深さ15cm程度である。標高3.85m付近で勾配のない平坦な底を有する。底の標高がI区のSD04と比べ若干差があるものの、軸が重なることから、つながる可能性が高い。覆土からの出土遺物は土師器片5点の他に、30-1に示す弥生土器片が出土している。口縁端部が内傾気味

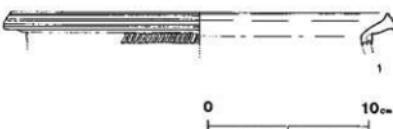
に上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施している。また、頸部外面には突帯文を貼り付けている。松本IV期に相当するもので、弥生時代中期後葉の所産であるが、混入したものと考えられる。

SD06(第4・31図)

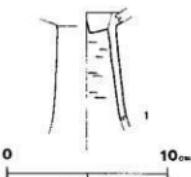
A4グリッドからB4グリッドにかけてSD06を検出した。北北西に軸を持ち、検出規模は上幅60cm程度、深さ10cm~15cm程度を測る。標高3.90m付近で勾配のない平坦な底を有する。検出幅、底の標高、軸が1区のSD05とほぼ一致し、つながる可能性が極めて高い。1区のSD05からの出土遺物はなかったが、この遺構からは31-1に示す土師器の高坏片が1点出土している。径5mm、深さ10mmの刺突痕を中心には有する径30mmの粘土製円盤を脚部の上部に充填し、坏部との接合を行っている。松山編年のI期に相当するものと考えられ、古墳時代初期の所産であろう。しかし、この遺物も混入品と考えられることから、遺構の時期を推定する資料とはなり得ない。

SD07(第4・32・33図)

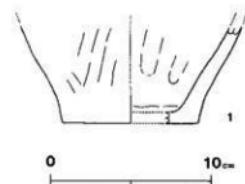
A4グリッドからB4グリッドにかけてSD07を検出した。北北西に軸を持ち、検出規模は上幅48cm~62cm程度、深さ15cm~20cm程度を測る。標高3.80m付近で底を有するが、勾配は認められない。また、1区の溝状遺構との関連も不明である。覆土からの出土遺物は少なく、図示した2点を数えるに過ぎない。32-1は弥生土器片で壺の底部と考えられる。平底で、器壁は底部から胴部にかけて外反気味に立ち上がっている。33-1は須恵器の坏である。底部の切り放しは回転糸切りであり、器壁は底部から体部にかけて内湾して立ち上がっている。高広IV A期に相当するものと考えられ、奈良時代の所産であろう。比較的大きな破片であり、また、包含層からも同時期の遺物が多数出土していることから、この遺構の時期を推定する遺物になり得よう。しかし、この遺構に付随する他の遺構などはないため、性格については推測が及ばない。



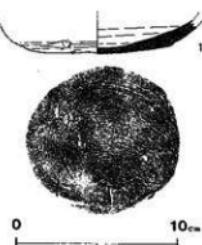
第30図 SD05出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第31図 SD06出土土師器実測図 (S=1/3)



第32図 SD07出土弥生土器実測図 (S=1/3)



第33図 SD07出土須恵器実測図 (S=1/3)

4. 2区遺構外の出土遺物

2区では1区と同様に1灰褐色土層及び2暗褐色土層から遺物が出土しているが、2暗褐色土層からの出土量が多い。土師器、須恵器の破片がほとんどで、それぞれコンテナで1箱分ずつ出土している。層によっての時期差は認められず、複数にわたる時期の遺物が出土している。特筆すべき遺物として、墨書き土師器とヘラ書き須恵器がそれぞれ1点ずつ出土しているが、これらについては項を別にして報告する。

土師器（第34図）

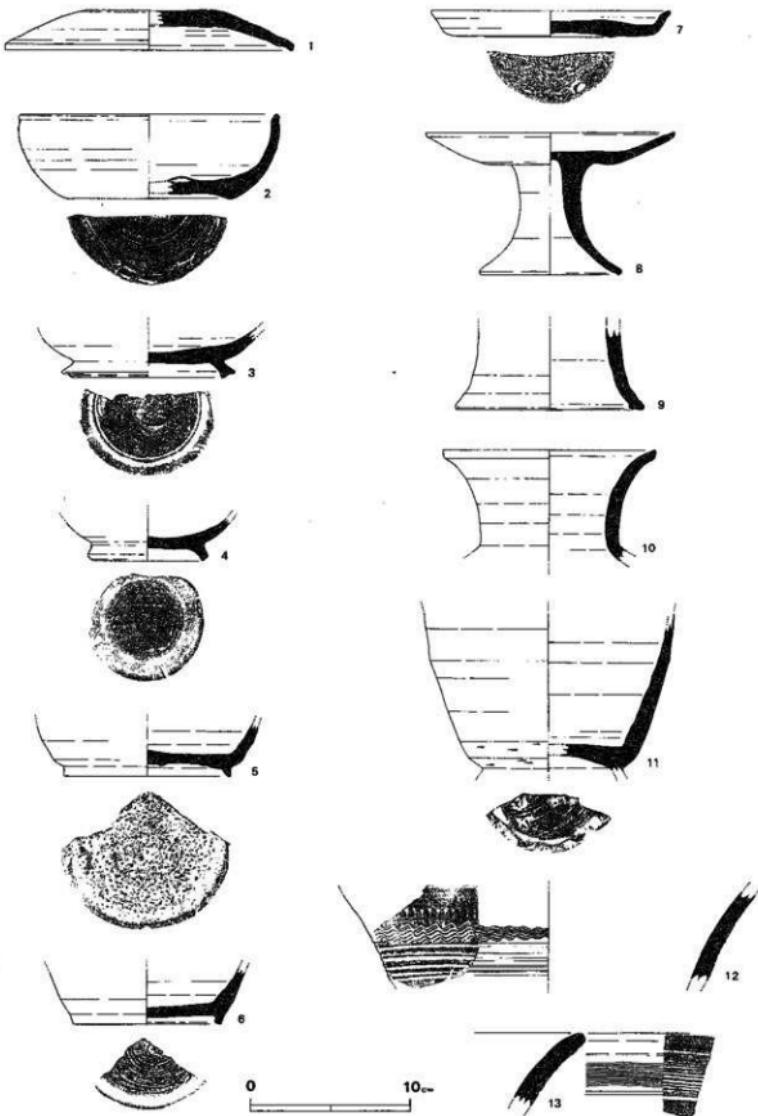
遺構外から出土する土師器は小片でかつ器表が風化しているものがほとんどで、実測に耐えうるものは少ない。図に示すものはいずれも壺であるが、壺の口縁片なども出土している。34-1・34-2はB1グリッドから出土しており、似た作りの壺である。いずれも器壁は底部から口縁部にかけて外反気味に開口し、内外面に赤色塗彩が施されている。底面には粗いハケ目と思われる切り込み状の筋が同一方向に複数観察できる。底部切り放し痕をナデ消した後に、何らかの所作によりこの痕跡が残ったと思われる。このように共通点は多いが出土地点は2m離れている。34-3の壺は底面外縁に高台が付き、器壁は内湾気味に立ち上がる。器表の風化が著しく調整などについては不明な点が多いが、プロポーションから奈良時代のものと思われる。



第34図 遺構外出土土師器実測図 (S=1/3)

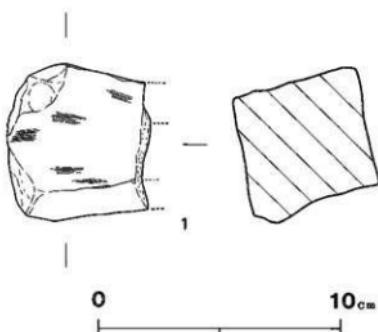
須恵器（第35図）

須恵器は土師器に比べ若干多く出土している。比較的大きな破片が多く、奈良時代のものを中心とする蓋、壺、皿、高壺、壺、壺など様々な器種が確認できた。35-1は蓋であるが振みの形状は不明である。35-2の壺は奈良時代のもので、体部が内湾し底面に回転糸切り痕が残る。35-3～35-6は高台付きの壺と思われる。35-3・35-4は高台が底面外縁から内寄りに高台が貼り付けられており、長頸壺である可能性も否定できない。底部切り放し痕は不明瞭であるが、奈良時代初め頃の所産と思われる。35-5・35-6は高台が底面外縁付近に付き、体部の器壁もやや直線的に立ち上がるところから、35-3・35-4に比べ、若干時期が下るが、奈良時代の範疇に収まるものと考えられる。35-7は皿である。底面の切り放し痕はナデ消され不明瞭であるが奈良時代のものであろう。35-8は壺部が浅い高壺である。壺部と脚部は別々に作られ接合されている。脚部に透かしはなく、7世紀



第35図 遺構外出土須恵器実測図 (S=1/3)

以降のものと考えられる。35-9は高杯の脚部と考えられる。脚端部は肥厚し凹面を持つ。35-10は壺の口縁部片である。外反して開口し端部に平坦面を持つ。35-11は長頸壺の胴部から底部にかけての破片と思われる。底面外縁や内寄りに高台が付いていた痕跡が残り、器壁は底部から直線的に立ち上がっている。胴部下位から底面にかけては、ケズリが施されている。時期については奈良時代と考えられる。35-12は大型の壺の口縁部片と思われる。5条あるいはそれ以上の沈線を施し、その上段に6条1組の波状文を巡らせている。35-13は壺の口縁部片と考えられる。1条の沈線を巡らせた上位に8条1組の櫛状原体による沈線を施している。



第36図 遺構外出土石器実測図 (S=1/2)

石器 (第36図)

2区の遺構外から36-1に示す砥石が出土した。元々は細長い直方体であったものが折れ、一部が残ったものと思われる。4面に研磨面を有しており、砂岩製である。これ以外の石器は先に報告した28-1の砥石のみであるため、今回の調査での石器の出土数は合計2点を数えるに過ぎない。

5. 3区の遺構

1区・2区の地山は灰褐色土層であったが、3区においては、2灰褐色砂層（地山）上面で遺構を検出した。検出面の標高は4.20m～4.50m付近で、1区・2区のそれと比較すると若干高いものの大差はないが、地山の上壤は異なっている。これは、調査地の西約50mの距離に存在する旧河川による地形营力が影響しているものと考えられる。1区・2区に比べ3区はこの旧河道寄りであるため、氾濫時に砂が堆積したものと思われる。同時に調査地の東、現在の四絆小学校付近に広がる後背低地もこの河川の作用に起因するであろう。

3区で検出した遺構は、土坑2基、ピット6基、溝状遺構2条であり、約8m離れた1区に比べて、遺構密度は小さくなる。遺構からの出土遺物はなく、また、遺構外からの出土遺物も土師器の小片1点を数えるに過ぎず、出土遺物の量も格段に減る。このことから、遺跡の中心からはずれているものと考えられる。2条の溝状遺構はともに南北方向に軸を持ち、規則性がうかがえる。しかし、ピットや土坑に付いては規則性は見あたらず、遺物からのアプローチも出来ないため、性格など不明な点を多く残す結果となつた。

6. 小山遺跡出土の墨書き土師器及びヘラ書き須恵器

墨書き土師器

墨書き土師器は、2区B1グリッドの2暗褐色土層から出土した。**37-1**に示す杯がそれであり、ほぼ完形に復元できた。法量は口径11.9cm、底径7.0cm、器高3.6cmを測る。器壁は底部から口縁部にかけて若干外反気味に開口しており、底部外面以外は赤色塗彩が施されている。体部内外面及び底部内面はナデ調整であるが、底部内面の調整は雑で凹凸を有する。底部外面を観察すると、切り放し痕はナデ消しが行われたためか不明瞭であるが、粗いハケ目と思われる切り込み状の筋が、同一方向に複数確認できる。底面は若干凹凸を有するにも関わらずこの痕跡が残っているため、スノコ状痕¹¹²⁾とは考えにくい。墨書きはこの底部外面に2文字確認でき「池内」と解される。時期については同一層からの出土資料を勘案すると9世紀後半の所産と思われる。

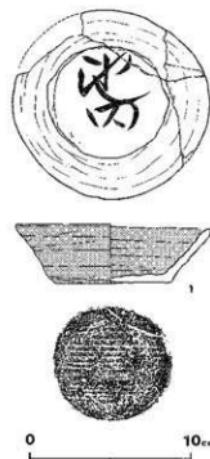
また、この遺物の直上からは**34-2**が、約2m離れた地点では**34-1**が出土している。形態、調整などが酷似しており、セットであった可能性が高い。

ヘラ書き須恵器

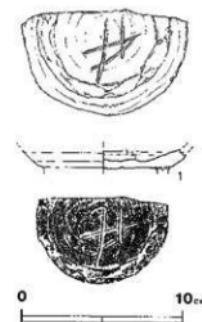
2区A3グリッドの2暗褐色土から、**38-1**に示すヘラ書き須恵器が出土した。10cm程度の底部のみの破片であるが、内面の調整が粗いため、器種は高台付きの長径壺と思われる。若干残存する肩部には回転ナデ調整が観察できる。底部内面には8mm大の三日月状の指頭圧痕と思われる痕跡が観察できる。底部外面を観察すると、高台が剥がれた痕跡が残るが、切り放し痕はこの高台の取付の際にナデつけられていて不明瞭である。ヘラ書きはこの底部外面に1文字確認でき「井」と解される。輪轂成形直後、胎土がまだ乾かないうちに刻まれたとみられ、線の脇に抉られた胎土が盛り上がっている。以下、図示した天地、現在の筆順を前提に記述する。線の特徴は1画・2画は線の上方が、3画・4画は線の右側が最も深く抉られている。また、1画・2画は払われ、3画・4画は止められている。これらのことから、この文字は、右利きの工人が先の尖った原体で筆順に従って刻んだと推定できる。また、2画が右上がりになっているのは3画への移行のためと考えられることから、素早い筆の運びであったことが推定できる。

以上はこの線刻を文字として考察したが、魔よけのための記号である可能性もある。

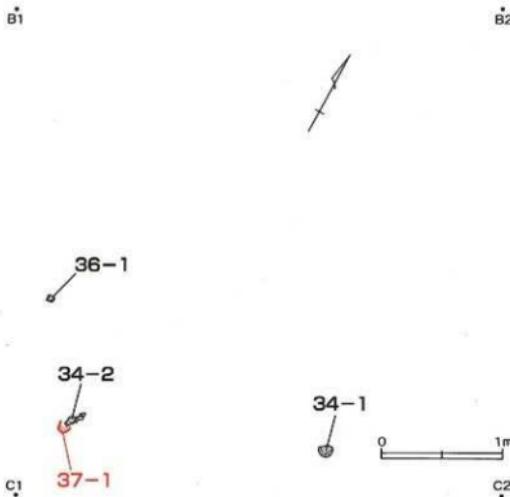
この破片から製作時期を推定するのは困難であるが、同一層からの出土遺物は概ね高古IV期の範疇に収まることから、ほぼ同時期のものである可能性が高い。



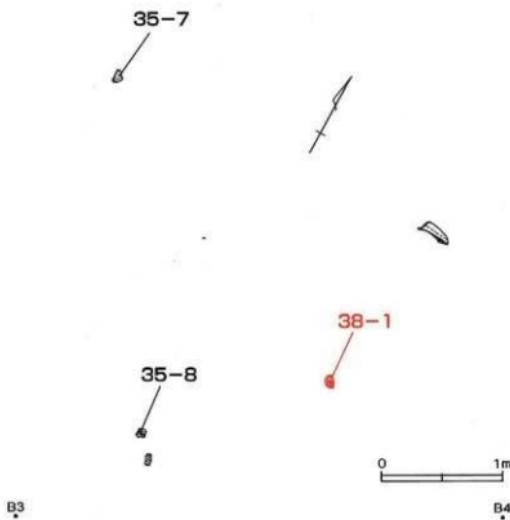
第37図 墨書き土師器実測図
(S=1/3)



第38図 ヘラ書き須恵器実測図
(S=1/3)



第39図 墨書き土師器出土状況 (S=1/40)



第40図 ヘラ書き須恵器出土状況 (S=1/40)

第5章 まとめ

今回の調査地である小山第3地点は、本格的な発掘調査が行われたことがなく、資料も工事中の出土あるいは表探により採取された遺物に頼らざるを得ない状況であったため、不明な点が多くあった。これら報告された遺物は、概ね弥生時代後期以降のものが断片的にみられるに過ぎず、遺跡の消長や中核になる時期、性格などを推測するのは困難であった。しかし、今回の発掘調査で多少なりとも資料を追加することが出来たので、可能な範囲で以下のことについて述べて、まとめとしたい。

遺跡の時期について

諸報告では弥生時代後期からの遺物が報告されているが、今回の調査では、遺構は検出されなかつたものの、30-1に示す弥生時代中期後葉の遺物が遺物包含層から出土している。付近に遺構が存在することを想定せるものであり、この時期に遺跡が出現すると考えられる。弥生時代の拠点集落に位置づけられる矢野遺跡との関係を解明することが今後の課題であろう。

また、古墳時代の資料が前期のものを除くと確認されておらず一時期空白期となるようであるが、奈良時代頃の遺物が多く出土したことから、この時期に再び集落が造営されたことがうかがえる。

遺跡の性格について

今回の調査で確認された土坑、ピット、溝状遺構はいずれも詳細は不明であるが、遺構の密度が特に1区では高く、残存状態の良い奈良時代の須恵器片が多く残っている。また、旧四絆小学校内での出土遺物の諸報告などを勘案すると、遺跡の中心は今回の調査地より北に存在すると考えられる。また、733年に編纂された「出雲国風土記」で「神門郡八野郷」に比定される箇所である今回の調査地で、8世紀から9世紀頃のものと思われる文字資料が2点出土したことから、郷庁の関連施設などが付近にあった可能性が高い。

旧河川による地形形成について

1区・2区の地山と3区のそれでは、土壤において顕著な差が確認できた。前者は黄褐色シルトであり、後者は灰褐色砂であった。この違いは、調査地の西に約50m離れた箇所を流れていた旧河川の作用が影響しているものと考えられる。3区以西はこの旧河川寄りに位置しているため砂が堆積し、1区・2区以東は河道から離れていくためシルト層が堆積していると推測される。

註

- 7) 足立克己・丹羽野裕 「高広遺跡発掘調査報告書 一和田地区造成工事に伴う発掘調査一」 島根県教育委員会 1984
- 8) 赤澤秀則 「講武地区県営両場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」 鹿児島教育委員会 1992
- 9) 川上 稔 「上長浜貝塚」 山陰市教育委員会 1996
- 10) 松本岩雄 「奈牛土器の様式と編年 山陽・山陰編」 株式会社木耳社 1992
- 11) 松山智弘 「山雲における古墳時代前半期の土器の様相 一大束式の再検討一」 「島根考古学会誌」 第8集 1991
- 12) 平石 充氏(島根県埋蔵文化財調査センター)にご教示いただいた。
- 13) 昌子寛光 「下黒田遺跡発掘調査報告書」 松江市教育委員会他1992 に報告例有り。
- 14) 平川 南氏(国立歴史民俗博物館)にご教示いただいた。

参考文献一覧

- 山本 清 「出雲市人塚町土器散布地」 『島根考古学』第2号 1948
- 池田耕雄 「四路小学校付近出土上器」 『出雲市の文化財』第1集 1956
- 山本 清 「山陰の須恵器」 『島根大学開学十周年記念論集』 1960
- 出雲高校社会部 「発掘レポ」 『紫苑』7号 1968
- 足立克己・丹羽野裕 「高広遺跡発掘調査報告書 一和田門地造成工事に伴う発掘調査一」 島根県教育委員会 1984
- 出雲考古研究会 「古代の出雲を考える5 出雲平野の集落遺跡II」 1986
- 昌子寛光 「下黒田遺跡発掘調査報告書」 松江市教育委員会他 1988
- 出雲市教育委員会 「出雲健康公園整備プロジェクト事業に伴う矢野遺跡第2地点発掘調査報告書」 1991
- 松本智弘 「出雲における古墳時代の前半期の土器の様相 一大東式の再検討一」 『島根考古学会誌』第8集 1991
- 加藤義成 「修正出雲国風土記研究」改訂4版 今井書店 1992
- 出雲市教育委員会 「四路地区遺跡発掘調査報告書」 1992
- 川中義昭 「出雲市小山遺跡第1地点の調査」 「古代金屑生産の地域的特性に関する研究」 1992
- 松本岩雄 「弥生土器の様式と編年 山陽・山陰新」 株式会社木耳社 1992
- 赤澤秀則 「講武地区県営園場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」 鹿児島市教育委員会 1992
- 岡崎雄二郎 「出雲・小山遺跡出土の鐵削頭」 『松江考古』第8号 1992
- 昌子寛光 「下黒田遺跡発掘調査報告書」 松江市教育委員会他 1992
- 大谷見二 「山陰地域の須恵器の編年と地域色」 『島根考古学会誌』第11集 1994

土器観察表

調査番号	部 位	出土地点	法量 (cm)	基準・文様の特徴	手作の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 (地)	備 考
7-1	土師器 环	1区 SK01	口径 15.2 高径 14.4	内外面に赤色金属を施す。	口縁部・体部 内外面: 回転ナデ	①褐色 ②普通 ③朱灰褐色	反転復元。
7-2	須恵器 环	1区 SK01	口径 10.9	口縁部附近は若干外反する。奈良時代の所産。	口縁部・体部 内外面: 回転ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰色	反転復元。 自然釉により、 体部は内外面とも灰褐色化。
7-3	土師器 环	1区 SK01	口径 24.7	口縁部は單純に外反し、先端の断面を呈す。	口縁部 内外面: 回転ナデ 断面以下 内面: ケズリ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②良 ③内面: にぶい黄褐色 内面: にぶい褐色	反転復元。
7-4	土師器 甕?	1区 SK01	- 不明	口縁部附近は若干外反する。	1口縁部 内外面: 回転ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にぶい褐色	
9-1	須恵器 甕	1区 SK02 4層	口径 19.5 高径 1.8 (底を除く)	口縁部を下方に若干引き出す。高広N B層。	1口縁部 内外面: 回転ナデ 中部 外側: ケズリ 内面: 回転ナデ	①まれに2mm以上の砂粒を含むが御常 ②良 ③青灰色	
9-2	須恵器 甕	1区 SK02 4層	口径 13.2 高径 8.0 高高 2.7	器壁は底部から口縁部に差下丸みを有 び立ち上がる。高広N層。	口縁部 内外面: 回転ナデ 底部 外側: 回転糸切り 内面: 回転ナデ	①まれに2mm以上の砂粒を含むが御常 ②小不良 ③灰色	ほぼ完形。 内外面とも火薙 が残る。
11-1	土師器 甕	1区 SK03 1層	口径 21.2	口縁部は単純に外反し、先端の断面を呈す。	口縁部 内外面: 回転ナデ 断面以下 外側: ハケ 内面: ケズリ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③にぶい褐色	反転復元。
11-2	須恵器 甕	1区 SK03 1層	口径 11.5 高径 8.0 高高 4.2	器壁は底部から口縁部にかけて直線的 に開口する。両面を底面外周部に隙り付 ける。高広N B層。奈良時代初期の所産。	1口縁部・外側 内外面: 回転ナデ 底部 外側: 回転糸切り 内面: ナデ	①2~5mmの大粒を含むが常 ②普通 ③灰色	反転復元。
11-3	須恵器 甕	1区 SK03 1層	口径 11.0 高径 7.0 高高 4.3	器壁は底部から口縁部にかけて直線的 に開口する。高広N B層。奈良時代の所産。	口縁部・体部 内外面: 回転ナデ 底部 外側: 回転糸切り 内面: ナデ	①2~5mmの大粒を含むが常 ②やや不良 ③にぶい褐色	完形。
11-4	土師器 甕 (焼口上部)	1区 SK03 1層	- 不明	外側に底の剥離した痕跡が残る。	外側: ハケ後ナデ 内面: ナデ 頂部付部 外側: ハケ 内面: オサヌ	①1.5mm以下の砂粒を多く含む ②普通 ③灰黄褐色	内外面とも焼成 時に一層墨色化 している。
12-1	須恵器 甕	1区 SK06	口径 15.0 高径 10.2 高高 2.5	器壁は底部から口縁部にかけて直線的 に開口する。高広N A層。	口縁部 内外面: 回転ナデ 底部 外側: 回転糸切り 内面: ナデ	①まれに2mm以上の砂粒を含む ②不良 ③灰色	反転復元。
14-1	土師器 甕	1区 SK07	口径 20.2	口縁部は頬部から外反して立ち上がり、 縁部附近でさらに若干外反する。	1口縁部 内外面: 回転ナデ 断面以下 外側: ハケ 内面: ケズリ	①2mm以下の砂粒をやや多く含み 難い。 ②やや不良 ③にぶい褐色	外側は墨化して いるが、一部窓 の付着が現存で きる。
14-2	土師器 甕	1区 SK07	口径 18.6 高径 6.7 高高 6.0	器壁は底面から口縁部にかけて内湾し て立ち上がる。	1口縁部・体部 内外面: 回転ナデ 底部 外側: ケズリ 内面: 回転ナデ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③淡褐色	反転復元。 内外面とも赤色 地の脈筋が残る。
15-1	須恵器 甕組片	1区 SK07	- 不明	器壁は球形に浅い内湾を呈す。	胴部 外側: タタキ (叩き板) 内面: オリギ (当て片)	①1.5mm以下の砂粒を含むが常 ②良 ③灰色	外側全面に自然 釉が付着する。

種類番号	基盤	出土地点	法長 (cm)	形態・文様の特徴	子法の特徴	①軸土 ②通常 ③色斑 (地)	備考
15-2	須恵器 环	1区 SK07	口径 14.0 底径 9.0 器高 4.3	器壁は底部から外側へ直線的に立ち上がり、全体から口縁部にかけて内側へ外反する。高広形A型。	口縁部・体部 内外面：同軸ナデ 底部 外側：同軸余切り 内面：同軸ナデ	①4mm以下の繊維を含むが密 ②良 ③灰褐色	反転復元。 完形だが小形。
17-1	土師器 束	1区 SK08 2・3層	口径 36.0 底高 29 (底定)	器壁は底部附近から頂部にかけて、若干内側へ外反する。	口縁部 内外面：同軸ナデ 上部：ハケ 内面：ケズリ 底部以下 外側：ナデ 内面：ケズリ	①4mm以下の砂粒を多く含み粗い ②普通 ③にほい黄褐色	内外側とも燒成時に一部黒色化している。
18-1	土師器 束	1区 SK09	口径 30.2	口縁部は単純に外反し、縁部は丸みを帯びる。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外側：ハケ 内面：ケズリ	①4mm以下の砂粒を多く含み粗い ②普通 ③灰褐色	反転復元。 内外側とも焼成時に一部黒色化している。
18-2	土師器 束	1区 SK09	口径 27.0	口縁部は単純に外反し、縁部に平坦面を持つ。	口縁部 外側：ナデ 内面：ハケ 底部以下 外側：ハケ 内面：ケズリ	①2mm以下の砂粒を多く含み粗い ②やや良い ③淡黄褐色	反転復元。
18-3	須恵器 束	1区 SK09	口径 18.2 器高 2.7	口縁部は下方に若干下引き出される。平底高2.7cmと外観上の痕跡から宝珠状腰を有していた（蓋を除く）と考えられる。	口縁部 内外面：同軸ナデ 底部 外側：同軸ナデ 内面：ナデ	①3mm以上の繊維を含むが密 ②良 ③灰褐色	
18-4	須恵器 环	1区 SK09	不 明	器壁は底部附近から直線的に立ち上がるが、全体から口縁部にかけて内側へ、縁部付近で若干外反する。高広形A型。	口縁部・体部 内外面：同軸ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰褐色	
19-1	須恵器 环	1区 P116	底径 8.9	器壁は底部から体部にかけて若干内側へ立ち上がる。	体部 内外面：同軸ナデ 底部 外側：同軸余切り 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を若干含むが密 ②普通 ③灰褐色	
20-1	須恵器 环	1区 P119	口径 16.0 器高 6 (底定)	器壁は底部附近から口縁部にかけて若干内側へ立ち上げるが、口縁部外側に船底焼が付着しているが、意識的についたものではなさそうである。	口縁部・体部 内外面：同軸ナデ	①まれに2.5mm以上の繊維を含むが密 ②良 ③灰褐色	反転復元。 口縁部・体部の外側は大部分は焼成時に黒色化している。
21-1	須恵器 束	1区 B4Gr 2灰褐色土	口径 15.6	口縁部は上下に延びし、縁面に3条の平行沈溝を施す。器形は「く」字状に扁曲する。平田一期。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 内面：ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にほい黄褐色	反転復元。
21-2	須恵器 高环	1区 A3Gr 1灰褐色土	不 明	口縁部は外傾して上方に拡張する。	口縁部・外側 外側：風化 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②普通 ③にほい黄褐色	
22-2	土師器 束	1区 不 明	口径 14.2 底径 9.5 器高 2.6	器壁は底部から口縁部にかけてやや外反気味に開ける。体部内外面及び底部内面に赤褐色色を施す。	口縁部・体部 内外面：同軸ナデ 底部 外側：ナデ削し？ 内面：同軸ナデ	①砂粒をほとんど含まず微密 ②良 ③橙色	反転復元。
22-3	土師器 束	1区 A1Gr 1灰褐色土	口径 13.9	器壁は厚さ内面に段を持つ。口縁部は単純に外反し閉鎖する。	口縁部 内外面：ナデ 底部以下 外側：ハケ 内面：ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む ②普通 ③灰褐色	反転復元。

発掘番号	管種	出土地点	法量 (ca)	形態・性状の特徴	手法の特徴	①粘土 ②焼成 ③色調 (地)	備考
22-4	土器部 蓋	1区 A 3 G r 2階褐色土	口径 27.6	器部は肥厚し内面に棱を持つ。口縁部は早時に外反し開口する。	口縁部 内外面：ナデ 断面以下 外側：ナデ 内側：ケズリ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②灰 ③に赤い變色	反転復元。 外側：茶が付着している。
22-5	土器部 蓋	1区 A 4 G r 2階褐色土	口径 30.7	口縁部は単純に外反するが、器部付近で若干内湾する。	口縁部 内外面：ナデ 断面以下 外側：ハケ? 内側：ケズリ	①3mm以下の砂粒を含む ②青 ③淡赤色	反転復元。
22-6	土器部 蓋	1区 B 3 G r 2階褐色土	口径 25.7	口縁部は単純に外反し、底部付近は器壁が若干肥厚する。	口縁部 内外面：ナデ 断面以下 外側：ハケ? 内側：ケズリ	①3mm以下の砂粒をやや多く含む ②青 ③橙色	反転復元。
22-7	土器部 到底土部	1区 A 2 G r 1阶褐色土	口径 9.7	底深狀を呈するものと考えられる。	体部 内外面：オサエ	①0.5mm以下の砂粒をまれに含む ②青 ③やや不良 ④に赤い黃褐色	反転復元。
22-8	土器部 到底土部	1区 B 1 G r 1阶褐色土	口径 8.5	底深狀を呈するものと考えられる。	体部 内外面：オサエ	①1mm以下の砂粒をまれに含むが密 ②やや不良 ③淡黃褐色	反転復元。
23-1	須恵器 蓋	1区 A 3 G r 2階褐色土	口径 15.4 基高 2.3 (縁を除く)	口縁部にかえりを有する。甲板外縁の痕跡から輪状溝を有していたものと考えられる。	口縁部 外側：不明 内側：回転ナデ 甲板 外側：不明 内側：ナデ	①1mm以下の砂粒を含むが密 ②やや良 ③外壁：黄褐色（自然釉） 内面：灰白	反転復元。 外側に自然釉が付着する。
23-2	須恵器 蓋	1区 A 3 G r 2階褐色土	口径 13.8 底径 9.0 基高 2.3	器は底部から内湾して立ち上がり、口縁部付近で若干窪曲して開口する。高広P.A型。	口縁部・体部 内外面：回転ナデ 底部 外側：回転糸切り 内側：ナデ	①まれに3mm大的の縦を含むが稀 ②やや良 ③灰色	反転復元。
23-3	須恵器 底	1区 B 2 G r 2階褐色土	口径 13.0 底径 7.0 基高 3.0	器壁は底部から口縁部にかけて若干外反し窪曲して開口する。高広P.A型。	口縁部・体部 内外面：回転ナデ 底部 外側：回転糸切り 内側：ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②青 ③灰色	反転復元。
23-4	須恵器 底	1区 B 3-B 4 セグメント 2階褐色土	口径 14.2 底径 9.8 基高 2.4	器壁は底部から口縁部にかけて若干外反し窪曲して開口する。高広P.A型。	口縁部・体部 内外面：回転ナデ 底部 外側：回転糸切り 内側：回転ナデ	①1mm以下の砂粒を含むが密 ②青 ③灰色	反転復元。
23-5	須恵器 底	1区 A 3 G r 2階褐色土	高台径 9.0	器壁は底部から内湾して立ち上がる。基部外縁よりやや内側に高台が付く。高広P.A型。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外側：不明 内側：ナデ	①2mm以下の砂粒を含むが密 ②やや良 ③灰色	反転復元。
23-6	須恵器 底	1区 A 1 G r 1阶褐色土	口径 19.0 高台径 14.3 基高 4.1	器壁は底部から口縁部にかけて若干外反し窪曲して開口する。基部外縁よりやや内側に高台が付く。高広P.A型。	口縁部・体部 内外面：回転ナデ 底部 外側：不明 内側：ナデ	①まれに5mm大的の縦を含む ②やや不良 ③橙色	反転復元。
23-7	須恵器 蓋	1区 A 4 G r 1阶褐色土	高台径 11.0	器壁は底部から若干内湾して立ち上がる。基部外縁に高台が付く。	口縁部 内外面：回転ナデ 底部 外側：回転糸切り 内側：回転ナデ	①まれに2.5mm大的の縦を含む ②やや良 ③灰色	反転復元。
23-8	須恵器 蓋	1区 B 4 G r 1阶褐色土	口径 19.2	口縁部は単純に外反する。	口縁部 外側：回転ナデ 内側：不明 断面以下 外側：不明 内側：オサエ（尚て具）	①まれに2.5mm大的の縦を含む ②やや良 ③灰色	反転復元。

調査番号	器種	出土地点	法番 (m)	形態・文様の特徴	手状の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 (施)	備考
23-9	信憑器 足	1区 A 1 G r 2階褐色土	口径 9.4 底径 5.2 高さ 11.5	口縁部の基盤は強く外傾した後に腹面を 変え、外反気泡間に開ける。網筋の最大 径付近に直徑15mmの円孔を伴つ。	口縁部・脚部・網筋 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り決外縁付 ケズリ 内面：同転ナデ	①まれに2mm大の縫を含むが密 ②良 ③灰色	
23-10	信憑器 腰?	1区 B 1 G r 1次褐色土	不明	口縁部は単純に開口するようである。	腰部以下 外面：回転ナデ? 内面：回転ナデ?	①まれに2mm大の縫を含むが密 ②良 ③外面：暗灰色 内面：灰色	反転復元。 口縫部内面及び 肩部外面上に自然 軸が付着する。
23-11	信憑器 高环	1区 A 2 G r 1次褐色土	不明	環部の内丸に中心を示したかのような直 径3mmの円形痕がある。肝臓から脛部にかけ て垂直方向に貫通しない切り込み状の 達しを2方に有する。	环部 外面：回転ナデ 内面：ナデ 脚部 内外面：ナデ	①まれに3mm大の縫を含む ②普通 ③灰色	
23-12	信憑器 高环	1区 B 4 G r 1次褐色土	脚端径 10.7	脚端部に平底面を有する。	脚部 内外面：回転ナデ	①0.2mm以下の砂粒を含む ②やや良 ③灰色	反転復元。
24-1	土製品 土製支脚	1区 B 1 G r 2等褐色土	不明	支脚の突起は2又残存しており、脚端径 は33mmである。背面欠損のため縫を有し ていたかどうかは不明である。	支脚 全面：ナデ	①2mm以下の砂粒をやや多く含む ②普通 ③棕色	
24-2	土製品 土製支脚	1区 B 1 G r 2階褐色土	脚端径 16.2	脚端部の後先端は平底で、幅31mmである。	脚部 外面：ナデ 内面：ケズリ?	①3~7mm大の縫を含む ②普通 ③棕色	反転復元。
24-3	土製品 瓶	1区 B 3 G r 2階褐色土	不明	器表・厚さは9mmであるが、横底面では内 側に肥厚し、縫面は幅7mmを有す。	脚部 外面：ハケ 内面：ケズリ	①2mm以下の砂粒を含む ②やや良 ③淡黄色	反転復元。 B 1 G r の2等 褐色土上で同一個 体と思われる破 片が出土している。
25-1	信憑器 环	2区 SK 0 2	口径 13.4 底径 8.4 高さ 3.8	器表は底部から内凹して立ち上がり、11 網筋付近で若干反屈し開口する。高広 V A型。	1) 縫部・脚部 内外面：回転ナデ 底部 外面：回転糸切り 内面：ナデ	①まれに2mm大の縫を含むが密 ②普通 ③灰色	反転復元。
26-1	信憑器 直	2区 P028	I:径 19.3 高台径 14.1 器高 2.5	器壁は底部から外反し開口する。底面外 縫よりやや内側に高台が付く。高広V A型。	口縫部・脚部 内外面：回転ナデ 底部 外面：不明 内面：ナデ	①砂縫をあまり含まず密 ②やや不良 ③灰色	反転復元。
27-1	土製品 土製支脚?	2区 SD01	脚端径 10.8	器表が厚く、脚端部に丁字縫を持つ。	脚部 外面：ナデ? 内面：ケズリ?	①3mm以下の砂縫をやや多く含む ②普通 ③にじみ褐色	反転復元。
29-1	須恵器 瓶底	2区 SD04	口径 11.8	口縫部は単純に外反し開口する。底面は 凹凸状になる。	口縫部 内外面：ナデ 脚部 内面：オサエ 脚部 外面：タキ (可吸板) 内面：オサエ (当て片)	①1mm以下の砂縫を含むが密 ②良 ③灰色	反転復元。 口縫部内面に自 然軸が付着する。
30-1	弥生上器 茎	2区 SD05	口径 23.5	口縫部は内側弧形に上下に延長し、縫 面には3条の凹縫を有す。脚部外縫に突 起部との合縫を行っている。松山1周 (某 田7層?)。	口縫部 内外面：ナデ	①3mm以下の砂縫をやや多く含む ②普通 ③にじみ褐色	反転復元。
31-1	土製器 高环	2区 SD06	不明	径 5mm、深さ10mmの刺突痕を中心に有す る径30mmの円形痕と、脚部の上部に充満し 跡との合縫を行っている。松山1周 (某 田7層?)。	脚部 外面：不明 内面：ケズリ?	①2mm以下の砂縫をやや多く含む ②やや不良 ③にじみ褐色	

検査番号	器種	出土地点	法量 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調(地)	備考
32-1	祭祀器 甕	2区 SD-07	底径 8.7	底盤は底部から腹部にかけて若干外反し立ち上がる。	脚部 外表面：ナゲ 内面：ケズリ模ナデ？ 底部 内外面：ナゲ	①1mm以下の砂粒を含む ②やや良 ③浅黄褐色	反転復元。
33-1	祭祀器 甕	2区 SD-07	底径 8.7	器壁は底部から内腹にかけて内湾気味に立ち上がる。高広N/A期。	脚部 内表面：回転ナデ 底部 外表面：回転糸切り 内面：ナゲ	①まれに7mm大的の塵を含む ②やや不良 ③にほい褐色	
34-1	祭祀器 甕	2区 B1 G r 2等褐色土	口径 12.0 底径 8.7 器高 3.3	器壁は底部から口縁部にかけて外反気味に開口する。	口縁部：作部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：ハケ？ 内面：ナゲ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③にほい褐色	反転復元。 内外面とも赤色 塗彩を施す。
34-2	祭祀器 甕	2区 B1 G r 1等褐色土	口径 12.6 底径 7.8 器高 3.3	器壁は底部から口縁部にかけて外反して開口する。	口縁部：作部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：ハケ？ 内面：ナゲ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③にほい褐色	反転復元。 内外面とも赤色 塗彩を施す。
34-3	祭祀器 甕	2区 A1 G r 1等褐色土	高台径 8.9	器壁は底部から内湾気味に立ち上がる。 底面外縁に高台が付く。	体部 内外面：回転ナデ？ 底部 外表面：回転糸切り？ 内面：ナゲ？	①2.5mm以下の砂粒を含む ②やや不良 ③灰色	反転復元。
35-1	祭祀器 甕	2区 A2-B2 セクションG-L 2等褐色土	口径 17.9 器高 2.5	口縫強度を下方に若干引き出す。高広N/A期？	口縁部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：回転ナデ 内面：ナゲ	①まれに2mm大的の塵を含むが密 ②普通 ③灰色	反転復元。
35-2	祭祀器 甕	2区 A1 G r 2等褐色土	口径 15.9 底径 10.2 器高 5.3	器壁は底部から内湾して立ち上がり、口縫強度付近で若干屈曲し開口する。高広N/A期。	口縫部：作部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：回転糸切り 内面：ナゲ	①まれに2mm大的の塵を含むが密 ②やや良 ③灰色	
35-3	祭祀器 甕？	2区 B4 G r 2等褐色土	高台径 9.3	器壁は底部から内湾気味に立ち上がる。 底面外縁内寄りに高台が肥厚する高台が付く。 長颈甕の可能性有り。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：不明 内面：回転ナデ	①1mmの砂を含む ②良 ③灰色	
35-4	祭祀器 甕？	2区 A1 G r 1等褐色土	高台径 6.9	器壁は底部から内湾気味に立ち上がる。 底面外縁内寄りに高台が付く。 長颈甕の可能性有り。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：不明 内面：回転ナデ	①まれに1mmの砂を含むが密 ②良 ③灰色	反転復元。
35-5	祭祀器 甕	2区 A2 G r	高台径 10.3	器壁は底部から若干内湾気味に立ち上がる。 底面外縁に高台が付く。 高広智人期。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：不明 内面：回転ナデ	①3mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰色	
35-6	祭祀器 甕	2区 A1 G r 2等褐色土	高台径 9.1	器壁は底部から若干内湾気味に立ち上がる。 高台を底面外縁に張り付ける。 高広智人期。	体部 内外面：回転ナデ 底部 外表面：回転糸切り 内面：ナゲ	①まれに2.5mm大的の塵を含むが密 ②普通 ③灰色	反転復元。
35-7	祭祀器 甕	2区 A3 G r 2等褐色土	口径 14.8 底径 12.0 器高 1.6	器壁は底部から5-10mm間にかけて若干外反気味に開口する。 高広N/A期。	口縫部：作部 内外面：回転ナデ 底部 内外面：ナゲ	①2mm以下の砂粒を含む。 ②やや良 ③灰色	反転復元。

標印番号	器種	出土地点	付量 (cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	①胎土 ②焼成 ③色調 (他)	備考
35-8	須恵器 高环	2区 A J G r 2階褐色土	口径 15.4 奥径 8.6 器高 8.9	环部は浅く、口縁部は上方に若干引き出す。脚部部も下方に若干引き出す。环部と脚部は前々に作られた後に接合する。	环部 口縁部：侈基 内外面：凹版ナデ 脚部：底板 外周：ケズリ 内面：ナデ 脚部：脚柱部・脚部 内外面：凹版ナデ	①3mm以下の砂粒を含む ②やや黄 ③灰色	
35-9	須恵器 高环	2区 B J G r 2階褐色土	胸高径 11.4	脚部相は若干肥厚し直面を持つ。	脚部 脚柱部・脚部 外面：不明 内面：ナデ	①砂粒をほとんど含まず ②良 ③灰白色	反転復元。 外面に自然釉が付着する。
35-10	須恵器 垂	2区 B A G r 2階褐色土	口径 13.2	器壁は外反して開口する。口縁部に平直面を持つ。	口縁部 内外面：凹版ナデ	①0.5mm以下の砂粒を含むが密 ②良 ③灰色	反転復元。 内面に自然釉が付着する。
35-11	須恵器 長颈瓶	2区 A J G r 1階褐色土	不 明	器壁は底部から直線的に立ち上がる。並而外輪に高台が付けられていた痕跡がある。	脚部 内外面：凹版ナデ 底面 外周：不明 内面：凹版ナデ	①砂粒をほとんど含まず ②良 ③灰色	反転復元。
35-12	須恵器 壺	2区 A J G r 2階褐色土	不 明	5条あるいはそれ以上の沈線を施し、その上位に6条1組の波状文を施す。	口縁部 外周：不明 内面：凹版ナデ	①1mm以下の砂粒を含む ②良 ③灰色	反転復元。 外面に自然釉が付着する。様子は推測。
35-13	須恵器 壺	2区 A J G r 2階褐色土	不 明	1束の沈線を施させ、その上位に8枚1組の波状波文による沈線を施す。	口縁部 内外面：凹版ナデ	①まれに1mmの大砂を含むが密 ②良 ③灰白色	様子は推測。 内外面に自然釉が付着する。
37-1	土師器 环	11区 B J G r 2階褐色土	口径 11.9 奥径 7.0 器高 3.6	器壁は底面から口縁部にかけて外反気味に開口する。底部外周に「油内」と解される墨書きあり。	口縁部・侈部 内外面：凹版ナデ 底部 外周：ハケ？ 内面：ナデ	①1.5mm以下の砂粒を含む ②良 ③にぶい褐色	内外面とも赤色 色彩を施す。
38-1	須恵器 長颈瓶？	2区 A J G r 2階褐色土	不 明	底面外縁内側に高台が付いていた痕跡がある。底部外周に「井」または魔よけ記号と思われるヘタ書きあり。	脚部 内外面：凹版ナデ 底部 外周：ナデ 内面：ナデ後オサエ	①まれに1.5mmの大砂を含むが密 ②やや黄 ③灰色	

石器観察表

標印番号	器種	出土地点	遺存状態	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
29-1	砥石	2区 S D01	一部欠	砂岩	13.7	6.1	5.6	810	2面に研削面を有し、切り込み状の筋を有する面が2面ある。
36-1	砥石	2区 B J G r 2階褐色土	一部欠	砂岩	5.8	5.7	5.0	290	4面に研磨面を有す。

写 真 図 版



1 調査前全景（南から）



4 調査風景（南西から）



2 表土掘削状況（北から）



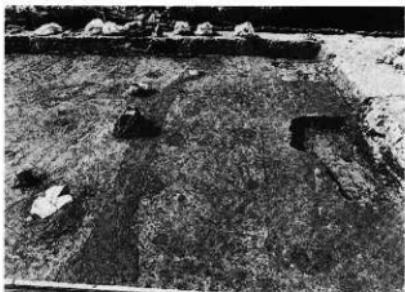
5 調査風景（南西から）



3 調査区配置状況（南から）



6 埋め戻し状況（南西から）



1 1区遺構検出状況（南東から）



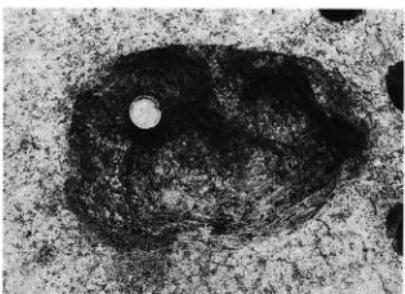
4 1区SK 0 3遺物出土状況（南東から）



2 1区SK 0 1遺物出土状況（東から）



5 1区SK 0 6遺物出土状況（北西から）



3 1区SK 0 2遺物出土状況（北東から）



6 1区SK 0 7遺物出土状況（南西から）



1 1区SK 08遺物出土状況（北西から）



4 1区完掘状況（北東から）



2 1区遺構外遺物(23-9)出土状況（北から）



5 1区完掘状況（南東から）



3 1区遺構外遺物(24-1)出土状況（北東から）



6 1区完掘状況（南東から）



1 2区SKO 2遺物出土状況（北東から）



2 2区P016完掘状況（南東から）



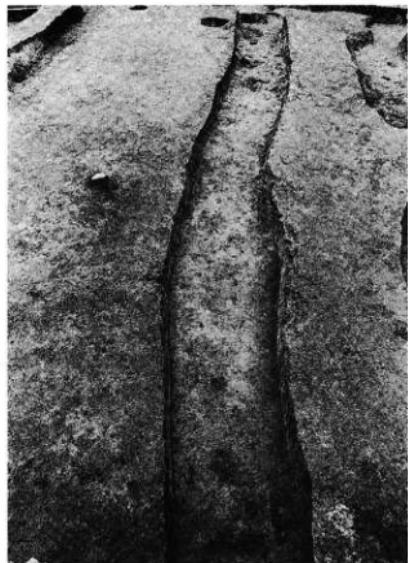
3 2区SD01遺物出土状況（北東から）



4 2区SD04遺物出土状況（南東から）



5 2区SD05完掘状況（南東から）



1 2区SD06完掘状況（南東から）



3 2区遺構外遺物(34-1)出土状況（北から）



4 2区遺構外遺物(35-8)出土状況（南西から）



2 2区SD07遺物出土状況（南西から）



5 2区遺構外遺物(38-1)出土状況（北西から）



1 2区完掘状況（北東から）



4 3区遺構検出状況（南東から）



2 2区完掘状況（南東から）



5 3区遺構検出状況（南西から）



3 2区完掘状況（南東から）



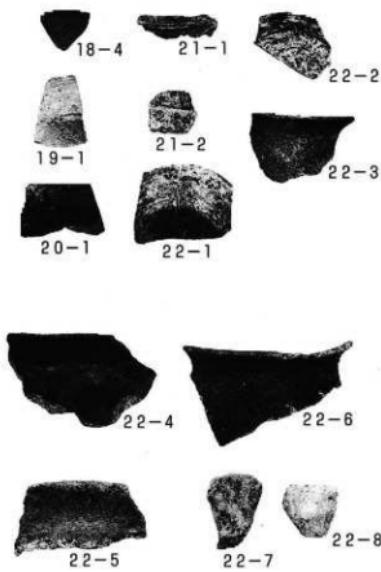
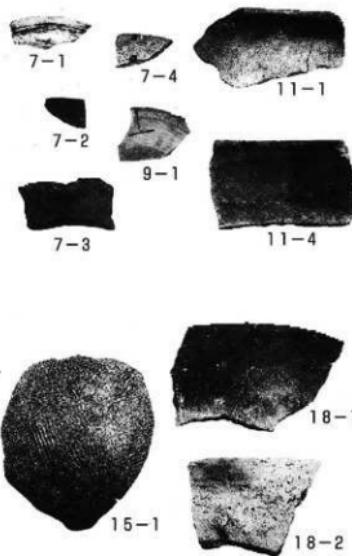
6 3区遺構検出状況（南西から）

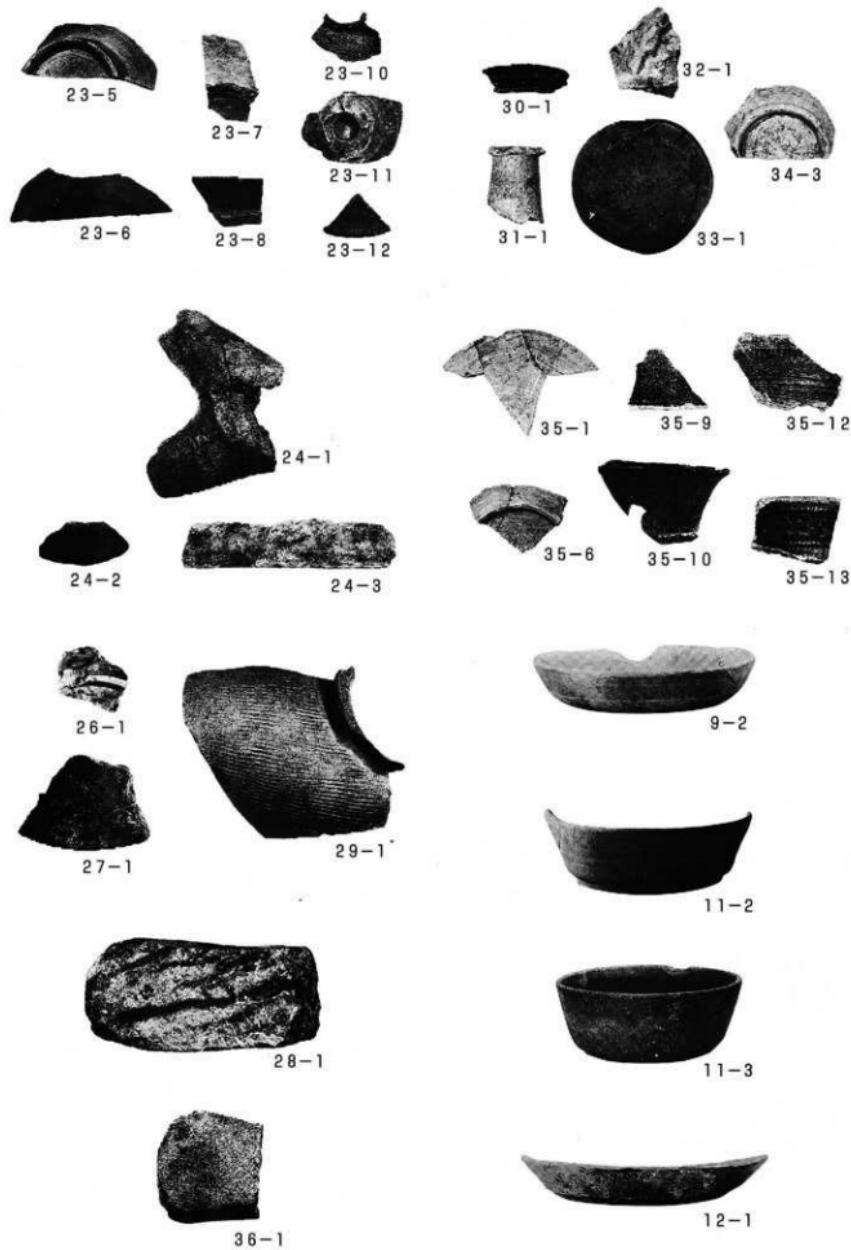


1 3区完掘状況（北西から）



2 3区完掘状況（南東から）







14-1



14-2



15-2



17-1



18-3



23-1



23-2



23-3



23-4



23-9



25-1



34-1



34-2



37-1



35-7



35-8



1 小山遺跡出土墨書土師器



2 小山遺跡出土ヘラ書須恵器

報告書抄録

ふりがな	おやまいせき
書名	小山遺跡
副書名	県立看護短大教職員宿舎整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	一
シリーズ名	出雲市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編集者名	三原・将
編集機関	出雲市教育委員会
所在地	〒693 島根県出雲市今市町北本町3丁目2番地1 TEL0853-23-3636
発行年月日	西暦1996年3月

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
小山遺跡	島根県 出雲市 小山町 648番地3, 650番地19	32203	G04 (出雲市御崎町)	35度 22分 18秒	132度 44分 57秒	199408 ~ 199409	453m ²	建物建設 予定地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小山遺跡	集落跡	奈良時代	土坑	墨書き土師器、 ヘラ書き須恵器	文字資料が発見されたため、調査地が『出雲國風上記』に記載されている「神門郡八野郷」の中心付近の可能性が高い。

県立看護短大教員宿舎整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

小山遺跡

1996年3月

発行 出雲市教育委員会
印刷 伊藤印刷